

認知症カフェのあり方と運営に関する 調査研究事業 報告書



2013年(平成25年)3月



公益社団法人
認知症の人と家族の会

認知症カフェで過ごす人々



認知症カフェで過ごす人々



認知症カフェの外觀と建物内部



認知症カフェの外観と建物内部



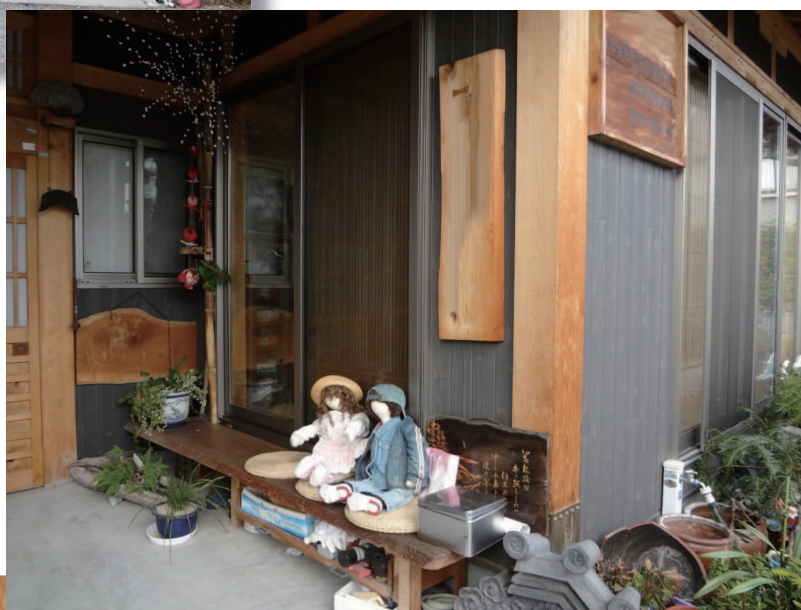
認知症カフェの外観と建物内部



認知症カフェの外観と建物内部



認知症カフェの外観と建物内部



認知症カフェの風景

1. お料理のおいしい認知症カフェ

空港からほど近い、周りは畑と民家ばかりの場所にある託老所の中にこの認知症カフェがあります。木造平屋のりっぱな建物は、清潔感がありながらもどこか親しみやすさを感じる外観です。玄関の上では大黒様が笑顔で迎えてくれています。駄菓子屋〇〇ちゃんの看板を横目に玄関に入ると、右手の部屋で「おばさん料理〇〇」が営業しています。最初に関所で500円を支払えば、あとは自由。大皿に盛られたおいしそうなお料理をめいめいが好きにとりわけ、好きな席に座って食事と会話を楽します。この日はクイモとしいたけのてんぷらや大根の煮物、ひじきの煮物、アジフライなど8種類のおかず、栗おこわ、引き割りのトウモロコシが入ったもちご飯の二種類のご飯に汁物。各テーブルには美しく飾られた地元産のレモンとともに、地元の名物の和菓子も並んでいます。

おいしく食事をいただいていると、併設のデイサービスを利用されているAさん、Bさんの二人の女性が入ってきました。お二人とも認知症とのことですが、料理を盛り付けるてきぱきとした様子はとても手際が良いです。笑顔が素敵なAさんは、この日はきれいなブルーのカーディガンを着ていらっしゃいました。お歳を聞いてびっくり、90歳を超えているとのこと。長生きの秘訣をお聞きすると、毎日壁に沿って立って姿勢を良くすることと体操をすることとのことでした。とても達筆とお話から、食後に市民ボランティアの方に促され、はにかみながらこのカフェを利用している人みんなに習字を披露されていました。

しばらくして、みんなから「Cやん」と呼ばれる満面に笑顔を浮かべた男性がやってきました。近所にあるグループホームで暮らしているそうです。Cやんは園芸が得意で、畑の手入れが日課となっています。畑はグループホームから少し歩いたところにあるのですが、Cやんが一生懸命作業している姿を見て、畑の前の家に住むおばさんが、最近話しかけてくれるようになったとうれしそうに話して下さいました。いつか、Cやんの作った野菜がこのカフェのメニューに加わることもあるかもしれません。

食後にコーヒーとお菓子を楽しみながら、市民ボランティアのDさんに話を伺いました。Dさんは月に二回営業するこの認知症カフェで、メニュー決定から材料の調達、調理までを一手に引き受けていらっしゃいます。一人500円の会費のみで運営されているので、毎回、いかに材料費を安くあげるかが大変ですが、地域の人々の寄付や知合いが届けてくれる野

菜などをうまく利用しながらされているとのこと。この日は前から気になっていたご近所の母娘がここに来てくれたことがとてもうれしく、今後の励みになったと話して下さいました。

最後に代表の方に話を伺いました。「ここではみんなで同じものを食べ、楽しく会話することで認知症の人の、人としての魅力や多様性を知ってもらえる。ここを地域の縁側のような存在にして、互いが互いを気にかける、認知症であってもなくても、障害があってもなくても関係ない心のバリアフリーな人のつながりを広げて行きたい。例えば、Cやんに話しかけてくれるおばさんは、こちらから頼んだわけでもないのに、自然とCやんを見守ってくれている。このような地域の人を自然に認知症ケアに巻き込む取り組みを今後も行っていきたい」と話して下さいました。

ここを訪れると、とにかくみんなが笑顔、笑顔。料理をとりわける時もみんなで協力し合って、自然に誰かが誰かの世話を焼いている。おいしい料理でおなかが満たされ、楽しい会話で心が満たされ、「また来たい」と誰もが感じる場所でした。(江口)

2. まちのえんがわの認知症カフェ

そのカフェは「まちの居場所」というのがぴったりの街中の民家で行われていました。普段は子育てママが子連れで集まる場所などとして開放されているそうですが、この認知症カフェは毎週日曜日に開かれています。外には「オレンジカフェ」と小さな看板が掲げられています。民家を改装したこの建物は、木目を生かした木を材料とした内装がとても落ち着く空間です。入ってすぐに大きな木のテーブルが目に入りました。5～6人がテーブルに集まって話しされていました。手前の4人掛けのテーブルにも、3人ほどが向かい合って話していました。それとは別に一段高くなっている畳のスペースがあり、そこでも若い女性と年配の男性2名くらいが話をしていました。私は予約なしで訪れたため、突然の訪問に少々驚かれましたが、話をしている人々は特に私を気にかけずお互いの対話の世界を楽しんでいるといった様子でした。一見、誰が運営者、支援者で、誰が認知症の人で、家族なのか全く分かりません。滞在した2時間ほどの間、色々と紹介はされたものの、最後までやはり区別はつきませんでした。それほど認知症の人がその場に溶け込んでいたのです。そして、支援者の方と認知症の人がお話ししているカウンター前の席に入らせてもらいました。別の輪では習字をしていたり、さらに奥の和室では少し込み入った話をされているように見えました。後で聞いたところによると、奥の和室では、その時家族の人にお話をじっくり聞いていたそうです。騒がしい喫茶の部屋とは別に、和室で落ち着いて話

を聞くこともできる、素敵な間取りになっています。

メニューの中から1杯100円で飲み物を選ぶと、クッキーと一緒に温かい飲み物を、喫茶担当の方が運んで来て下さいました。喫茶担当は小さな厨房で忙しそうです。支援者の中で、お話を聞く人と、喫茶の人は役割を分担して、どちらもが中途半端にならないようにしているのだと思いました。認知症カフェは10時～15時ごろまで行っているということでしたが、午前中で帰る人もいるし、午後まで居る人もいます。その日は、奥さんがカフェにいる認知症のご本人にお弁当を届けに来て、そのままカフェでお話しして帰って行かれたというエピソードもありました。お昼はそれぞれで摂り、午後から来る人もいます。午前中は、「ツアー」といって近くまで散歩に行く人を募り、数名で散歩に出かけたり、マラソンを見たりする企画もあります。ご本人がカフェに居る間、一緒に来た奥さんが、日頃できない買い物に2時間ほど行って戻ってくる、ということもあるそうです。まさにカフェでの過ごし方や生かし方は様々なのだと思いました。かなり遠くから通って来ている人もいましたし、近くだけれども、迷いながらやっとたどり着いたと言って来られている人もいました。帰りは近くまで徒歩で送り、カフェが無事終了となりました。私はカフェで認知症の人ともお話ししましたが、とても楽しい時間でした。日頃の色々なハプニングとか、昔習っていたおけいこのことなど、様々な話題がありました。自分にもあるなあと思うようなこともあれば、全く知らないことを教わったり、双方向の会話が新鮮でした。会話をゆっくりできるというのは、案外、日常ではないことなのかも知れないと思い知りました。そして市民ボランティアの方ともお話しして、人間として学ぶことがたくさんありました。最後の支援者の反省会にも参加させてもらいましたが、認知症カフェを運営していく上で、色々な配慮の積み重ねがあって、居心地良い空間と時間が提供されるのだということも知りました。このカフェでは支援者の中に、専門職、社会福祉を学ぶ大学生、一般市民など様々な立場の人がいて、それぞれの立場でカフェを良い方向にしていこうという気概が感じられました。(鈴木)

3. デイサービスの場所での認知症カフェ

郊外の駅を降りて、5分と歩かないうちにこの認知症カフェはありました。民家に囲まれた二階建ての建物は、送迎車両のための広い駐車場があることを除いては、まわりのお宅とさほど変わった様子はありません。この建物の一階で認知症カフェが実施されています。建物に入ると広々とした玄関ホールがあり、右手にはこれまた広々とした明るいいりびんぐがありました。普段はここで認知症対応型通所介護のサービスが提供されています。

壁には絵画や利用されている方々の作品が飾られていました。今日はここが認知症カフェの会場になります。参加予定者は20名程度とのことで、4～5人から7～8人が座れるテーブルが3つほど並べられています。看護職による介護食についてのレクチャーがあるため、スクリーンにはパソコン画面が映し出されていました。レクチャーに続く後半のカフェタイムは試食もあるとのことで、テーブルにはお菓子と共に栄養補助食品が並べられていました。

参加者のみなさんが受付を済ませ、めいめい好きな席に座って、コーヒーを楽しみながら会話されていると、レクチャーが始まりました。嚥下に問題のある方や塩分などに制限のある方の食事について、自らも大学院で学ぶ看護職がレクチャーして下さいました。おいしくない、甘いというイメージのある栄養補助食品ですが、最近はコーンスープ味や豆腐味のものもあり、おじやや白和えなどの料理にアレンジすることも可能とのこと。このような専門職からの情報が得られるのも認知症カフェの良いところの一つです。

カフェタイムでは、栄養補助ゼリーをクラッカーにのせてトッピングをしたり、めいめに試食をしながら会話を楽しんでおられました。今日は認知症のご本人もお一人参加されているとのことでした。各テーブルの間には専門職であるデイサービスの職員や市の地域包括支援センターの相談員の方がまわり、ご家族のお話や疑問に答えていました。

私が参加したテーブルではお姑さんを介護されている A さんが、最近なかなかシャンプーをしてくれなくなり困っていることを、同じ介護をされている方に相談していらっしゃいました。介護にあたってはご本人との関係ももちろんですが、一緒に暮らす家族の理解もとても重要です。どんな方法で巻きこんでいったらいいか、また、自分の時間をうまく作って気分転換する方法など、介護を経験したご家族でなくてはできないアドバイスの数々が披露されていました。二時間半の認知症カフェの時間はあっという間にすぎ、まだまだ語りつくせない思いもありつつ、ちょっぴりすっきりした表情でみなさん帰っていかれました。

事務長さんに聞いたお話では、普段、デイサービスでは送迎のときに少し関わるだけで、家族の話をじっくり聞くことがほとんどできなかったが、認知症カフェを始めたことで家族がどんな情報を必要としているのか、また、どんな思いを抱えているのかを知ることができたそうです。しかし、一般市民の方の参加はほとんどないため、今後は家族への支援を強化しながら市民の参加も促していきたいとのことでした。(江口)

は じ め に

公益社団法人 認知症の人と家族の会
代表理事 高 見 国 生

人は一人では生きられない。まして認知症という病気になったり、認知症の人を支えて生きる家族になったりしたら、なおさらである。

人は困難な事態に陥ったとき、同じ境遇の仲間との絆こそが力になり、周囲で理解してくれる人々の支援によって立ち上がれることを知る。それは東日本大震災の時にもあらためて証明されたことである。

「家族の会」の活動の3本柱は、つどい、相談、会報の発行である。これは認知症の人とその家族が、当事者どうしで励ましあい助けあい、周りの人たちに理解と支援を訴えるためのなくてはならない取組みである。私たちは33年前、認知症に対する社会的施策は皆無、無理解と偏見の時代に、集まって語り合う“つどい”を心のよりどころとして出発した。辛さを吐き出し合う、知恵を交換し合う、元氣を出し合う—そんな場がつどいであった。それとともに、つどいは理解者と支援者を増やし、介護の社会化をすすめる力ともなった。

時は流れて、昨年6月。厚生労働省は、「今後の認知症施策の方向性について」の方針を示した。それに基づくオレンジプラン（認知症施策推進5か年計画）も策定した。その中で、「認知症カフェ」の普及が謳われた。認知症カフェとは、「認知症の人と家族、地域住民、専門職等の誰もが参加でき、集う場」と定義されている。

「痴呆」の用語が「認知症」と替わり、本人が思いを語り、認知症サポーターが390万人を超える時代、何よりも認知症の人そのものが従来の推計を大幅に上回ると発表された時代—認知症新時代になって、認知症はまさに国民的課題となり、世界各国でも喫緊の課題として取り組まれるようになった。

このような時代背景の中で、認知症ではないかと不安を抱く人や初期の認知症の人や家族が気軽に立ち寄り、地域の人たちにも支持される場の意義は大きいし、オレンジプランより以前からすでに同様の趣旨で取り組まれている実態もある。ただし、当然ながらその実施内容や運営形態は様々であり、どこまでを認知症カフェと呼ぶべきかという基準もない。

この調査は、認知症カフェが認知症に関する取組みの中では“新顔”ではあるが、認知症ケアの中で重要な位置を占めるものであるという前提に立ち、各地で取り組まれている実態を調査しその中から、認知症カフェを実施した場合の効果や課題を明らかにすることを目指した。

その結果、認知症の人、家族に対する効果は言うに及ばず、地域住民や専門職、ボランティア、地域や社会に対する効果も明らかになった。そして、「認知症カフェの要素7つ」「認知症カフェ 10の特徴」を提示することができた。

行政の方や社会の人たちには認知症カフェを理解するために、すでに取り組んでおられる方々には自分のところの再確認とさらなる発展のために、これから認知症カフェに取り組もうとしている方々には実施するための手引として、この報告書が活かされればうれしい限りである。

2013年3月

目 次

I . 調査の概要	1
II . 調査対象について	3
a. 認知症の人と家族が集う場の発展型	3
b. 認知症または高齢者の専門施設発展型	4
c. 自治体のモデル事業型	5
d. 地域住民が集う場の発展型	6
e. 既存形態にとられない個人の実践発展型	7
III . 調査結果	9
1. 開始時期	9
2. 認知症カフェの目的はどのようなことか（5つ選択）	10
3. 認知症カフェで実施している内容	11
4. 認知症カフェの効果	13
5. 認知症カフェの運営母体	16
6. 認知症カフェの活動場所	16
7. 支援スタッフの職種	17
8. カフェ参加者の内訳	17
9. 本人の参加条件	19
10. 市民の参加条件	19
11. 利用者の負担	19
12. 年間のカフェ運営費用	20
13. 運営費の財源	20
IV . まとめの文書	21
1. 認知症カフェが始まった背景	21
2. 認知症カフェとはどんな場であるのか	22
認知症カフェの要素7つ	22
認知症カフェ 10の特徴	23
3. 考察	24
3-1) 認知症カフェの効果	24
3-2) 認知症ケアにおける、認知症カフェの意味	37
3-3) 認知症カフェの今後の課題と今後	40
V . 海外の認知症カフェに関する情報収集内容	43
VI . 資料集	
＜資料1 認知症カフェで実施している内容一覧＞	45
＜資料2 認知症カフェ調査一覧＞	46
＜資料3 開始時期・開始の理由・動機・開催頻度の一覧＞	52
＜資料4 調査票＞	55

I. 調査の概要

認知症の人と家族の会（以下、家族の会）では2011年度、家族支援のあり方を調査した。その中で、介護する家族は、本人が認知症であることやその症状によって不安や悲しみを抱え、将来に不安を抱えていた。認知症の本人の人柄が変化したり、家族である自分のことを疑ったり怒ったりすることに、家族として大きな悲しみと絶望を抱いていることも分かった。

本人と家で過ごす時間の大半は、それまでの本人との比較であり、できないことへの着目から生じる辛さでもあった。介護を行う者として優しくなれない自分への悔しさもあった。これらは、どんな家族でも抱える悲しみや絶望、悔しさであると言える。家族だからこそ生じる悲しみや悔しさの感情であり、家族として介護を継続する上で家族を消耗させる出来事でもあると考えられた。

しかし、本人が孫と一緒に楽しそうに遊ぶ姿を見たり、本人が心から楽しい・嬉しいと思えるような場面で出す笑顔や感謝の言葉は、介護する家族にとって救われる経験であることも確かであった。介護する者・される者という家族関係の中では、それぞれの役割の中で、決まりきったやりとりが繰り返されがちである。家族だからこそ生じる感情や関係性の辛い・悲しい側面を、緩和する方向のケアが望まれていることを昨年の調査報告の一部で提示した。認知症本人・家族それぞれに対する固有のケアはもちろんのこと、両者が家族であるがゆえに生じる問題をケアする体制が望まれていることは、すでに認知症ケアの領域において周知のトピックスと言える（例えば「2013年 京都式認知症ケアを考えるつどい」¹⁾）。

そこで今回、認知症の人と家族が安心して集える場としての認知症カフェ、及びそれに類するつどいの場（以下、両者を含めて認知症カフェとする）を調査し、その内容や効果、今後の課題について明らかにした。認知症カフェとは、厚生労働省が2012年6月18日に出した「今後の認知症施策の方向性について」（以下、6.18文書）の中で「認知症の人と家族、地域住民、専門職等の誰もが参加でき、集う場」として、地域での日常生活・家族支援の強化に向けての取り組みのひとつに挙げているものである²⁾。すでに実践している事例が各地にあるが、横断的に調査を行うのは今回初めてである。今回の調査では、2種類の方法で調査を行った。調査対象28か所のうち11か所は、認知症カフェに出向いて聞き取り調査を行い調査票にも記入を依頼した。残りの17か所は調査票を配布して、代表者に調査票への記入を依頼した。これらをまとめた結果が本報告書で述べる内容である。

調査票は自由記述を求めるものと、選択式の設問に分かれている。選択式の回答についてはグラフや表で結果を表示した。自由記述については、調査した認知症カフェの類型化を行う際に参考にした他、どんな効果を感じているのかについては、認知症カフェの効果として質的に分析した。このような結果の分析を通じて概要として以下のことが分かった。

1. 設立の母体及び運営は、約半数が社会福祉法人と NPO 法人であり、民間の活動によるものであった。
2. 活動場所は様々で傾向として整理できないほど多様であったが、民家を改装したり、施設の一部であっても地域の人が気軽にアクセスできる場であった。
3. 開始時期は2012年を境に急激に増加している。

4. 支援スタッフの半数は、ボランティアや民生委員、家族会、認知症サポーターといった専門職以外の人達であった。
5. 利用者は平均すると、本人：家族：支援者：市民＝１：１：１：２の割合であった。
6. 認知症の重症度や年齢等、本人の利用に条件を設けているところが約半数あった。
7. 年間運営費は、50万円未満のところと、200万円以上と、大きく分けて2つの群に分かれていた。
8. 内容として、全てのところが飲み物と茶菓の提供をしていた。また実費として飲食費を利用者が負担していた。

以上のような実践の実態を提示するとともに、我が国における認知症カフェの意義についても述べていく。

参考・引用文献

- 1) 京都市認知症ケアを考えるつどい実行委員会 (2012). 認知症を生きる人たちから見た地域包括ケア 京都市認知症ケアを考えるつどいと2012京都文書, クリエイツかもがわ, 京都.
- 2) 厚生労働省認知症施策担当プロジェクトチーム (2012-06-18). 今後の認知症施策の方向性について, <http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/dementia/dl/houkousei-02.pdf>.

Ⅱ．調査対象について

調査した28か所を開設の動機や目的ごとに整理した結果、開設の動機別に以下の5つに分けて類型化ができた。但しこれらの類型は、報告内容を述べるために行った分類である。従ってそれぞれは明確に分けられるものではなく、重なり合う部分もある。

- a：認知症の人と家族が集う場の発展型（8か所）
- b：認知症または高齢者の専門施設発展型（6か所）
- c：自治体のモデル事業型（3か所）
- d：地域住民が集う場の発展型（7か所）
- e：既存形態にとらわれない個人の実践発展型（4か所）

以下、それぞれの類型について説明する。（P.45以降の資料集も参照）

a．認知症の人と家族が集う場の発展型

これらのカフェでは、もともと家族会や認知症の人や家族に向けたつどいを行ってきたという背景を持っており、立ち上げた人は、自身が家族として認知症の人を介護した経験がある場合がほとんどであった。「本人の何かしたいという思いを生かす場として開設した」(a-1) カフェは調査対象で唯一、運営目的に「認知症の人の思いを社会に発信する場」を挙げている。これらのカフェでは、本人を含めて家族の支援が優先度の高い目的である。カフェを開く場は、個人的な資金でリフォームした自宅の提供や、自治体の施設を利用するなど様々だが、自身の介護の経験に基づいたニーズや、認知症の人と家族の支えになりたいという思いが、開設を可能とする助成金の獲得やモデル事業の採用などに繋がっているカフェもあった。

a．認知症の人と家族が集う場の発展型 一例

運営母体	家族会
運営費用	年間 10 ～ 50 万円
資金源	自己資金、財団などの地域活動への助成金、参加費
活動場所	個人の家
カフェの目的	認知症の人の社会参加、思いの発信、本人や家族への心理的支援
開催頻度	月一回
実施内容	お茶を飲みながらの会話。認知症の人がサービスすることも。
参加費	一人一回につき 500 円 [昼食・飲み物代実費]
参加者	一回につき、20 人程度。認知症の人と家族とそれ以外の割合は半々。
スタッフ	家族の会メンバー、市民ボランティア、認知症サポーター、専門職
ネットワーク	社協、地域包括支援センター

b. 認知症または高齢者の専門施設発展型

これらのカフェ運営の動機や目的は、若年認知症の人の行き場と彼らを理解するきっかけとなる場をつくることが掲げられており、認知症の初期の人とその家族の支援や相談の場としての機能が、運営目的として優先度が高いカフェである。もともと特別養護老人ホームの一室にコミュニティ・カフェを開設して活動していた実績のある法人が、新たに地域の中でカフェを開いた例や、認知症に限定せずに地域住民を参加者として受け入れる例がある。また、普段から様々なグループがコミュニティ・カフェとして使用している場を毎週1日空いている時に、認知症カフェとして利用している例もある。医療・介護専門職や福祉専門職がボランティアとして運営している場（b-1、b-2）や、地域のニーズに詳しい社会福祉協議会の職員が中心になっている場（b-5）など、医療・介護・福祉とのつながりを持ちつつ、日常的な場で相談支援の機能を果たすという点において特色がある。

b. 認知症または高齢者の専門施設発展型 一例

運営母体	社会福祉法人
運営費用	年間 100 ～ 200 万円
資金源	法人の資金、財団などの助成金
活動場所	施設の一室
カフェの目的	本人や家族への心理的支援、ピアカウンセリング、ボランティア育成
開催頻度	週一回
実施内容	専門職による講話や相談、ゲームや脳トレ、お茶を飲みながらの会話、料理教室など
参加費	飲み物一杯につき 100 円
参加者	一回につき、10 ～ 20 人。認知症初期の人の参加が多い。
スタッフ	運営母体の施設に勤務する専門職
ネットワーク	社協、地域包括支援センター

c. 自治体のモデル事業型

開設のきっかけとして、自治体レベルの施設や公共事業、認知症対応型カフェの委託などを受けて実施しているカフェである。認知症の初期の人への支援を目的にしている場合もあれば、誰もが利用できる地域に開かれたつどい場を行っている場合もある。横のつながりを求める地域住民のニーズを実現する形で自治体が提供する助成金や施設が活用されている（c-2, c-3）。

c. 自治体のモデル事業型 一例

運営母体	市町村
運営費用	年間 200 万円以上
資金源	市町村からの補助金
活動場所	施設の一室
カフェの目的	軽度認知症の人への支援、制度に関する情報提供
開催頻度	週一回
実施内容	お茶を飲みながらの会話。クラフト、体操。
参加費	無料
参加者	一回につき、10 ～ 20 人。
スタッフ	医師、作業療法士、介護職などの専門職
ネットワーク	社協、地域包括支援センター、医師会、民生委員、老人会

d. 地域住民が集う場の発展型

「地域の縁側」「まちの居場所」等の呼称で親しまれている、地域住民の横のつながりを形成することを目指した、地域住民誰もが利用できるコミュニティ・カフェとしての目的を優先するつどい場である。開催頻度は毎日開いている場も多く「いつでも誰でも」気軽に利用できる機能が強い。認知症の人はもちろん、それ以外の人も含めて「特定の人々の集会ではなく、地域の人々がお互いの関わり合いの中から活力を見いだせる場」(d-4)であることにこれらのつどい場の特色がある。

d. 地域住民が集う場の発展型 一例

運営母体	NPO 法人
運営費用	年間 100 ～ 200 万円
資金源	寄付、会費など
活動場所	民家、空き店舗
カフェの目的	地域住民のつどいの場m地域の高齢者の見守り
開催頻度	毎日
実施内容	食事の提供、お茶を飲みながらの会話。希望により手芸など。
参加費	一人一回 500 円（食事をする場合）または飲み物代 100 円
参加者	一回につき、10 ～ 20 人。独居高齢者が多い。
スタッフ	NPO 法人スタッフ、市民ボランティア
ネットワーク	社協、地域包括支援センター

e. 既存形態にとらわれない個人の实践発展型

立ち上げた人が自らの介護の経験や地域のニーズを、自らの行動で解決するために開設された背景を持つ。特に、立ち上げた人の思いが、そのつどい場のあり方そのものを反映しており、運営者の熱意が活動を支えている。認知症をはじめ、介護保険制度のサービスに合わない人々が、安心して過ごすことができる場となっている。また、本人と家族、そして医療・介護専門職、地域の一般住民、地自体職員、福祉専門業者等の様々な立場の人が利用客やボランティアとして出入りし、普段の生活空間の中で様々な立場の人が出会う機会が自然発生している。また、地域住民や専門職のボランティアが育成される場ともなっている。これらのつどい場は週1回以上の頻度で開かれており、時間や立場にかかわらずいつでも気軽に相談でき、それを行政につなげてもらえる、地域の心強いサポーターあるいはメッセンジャーとしての役割も担っている。

e. 既存形態にとらわれない個人の实践発展型 一例

運営母体	NPO 法人
運営費用	年間 100 ～ 200 万円
資金源	個人資金、NPO 賛助会員の会費、寄付、代表の講演料など
活動場所	民家（代表の自宅など）
カフェの目的	行政の制度ではフォローしきれない人の支援、介護者・高齢者支援、地域の横のつながりづくりなど
開催頻度	ほぼ毎日
実施内容	お茶を飲みながらの会話。食事の提供、宿泊。
参加費	一人一回 500 円
参加者	日によってばらつきがある。年間のべ 2000 名程度。
スタッフ	市民ボランティア
ネットワーク	社協、地域包括支援センター

これら5つに分けた類型を図式化すると以下ようになる。

現在我が国で実践されている認知症カフェは、認知症の人とその家族が集う場を中心に、それらから派生する機能により、図1・2のように機能分化していると言える。これらはそれぞれの強みを補強しあって認知症の人と家族を支援している。

図1 カフェ誕生の経緯からみた類型図

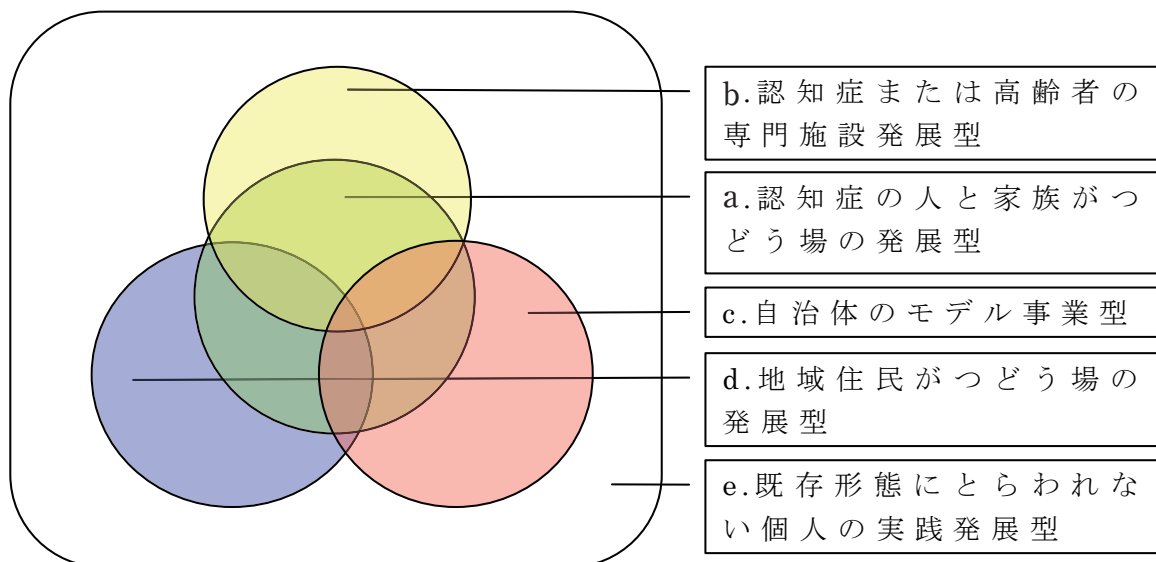
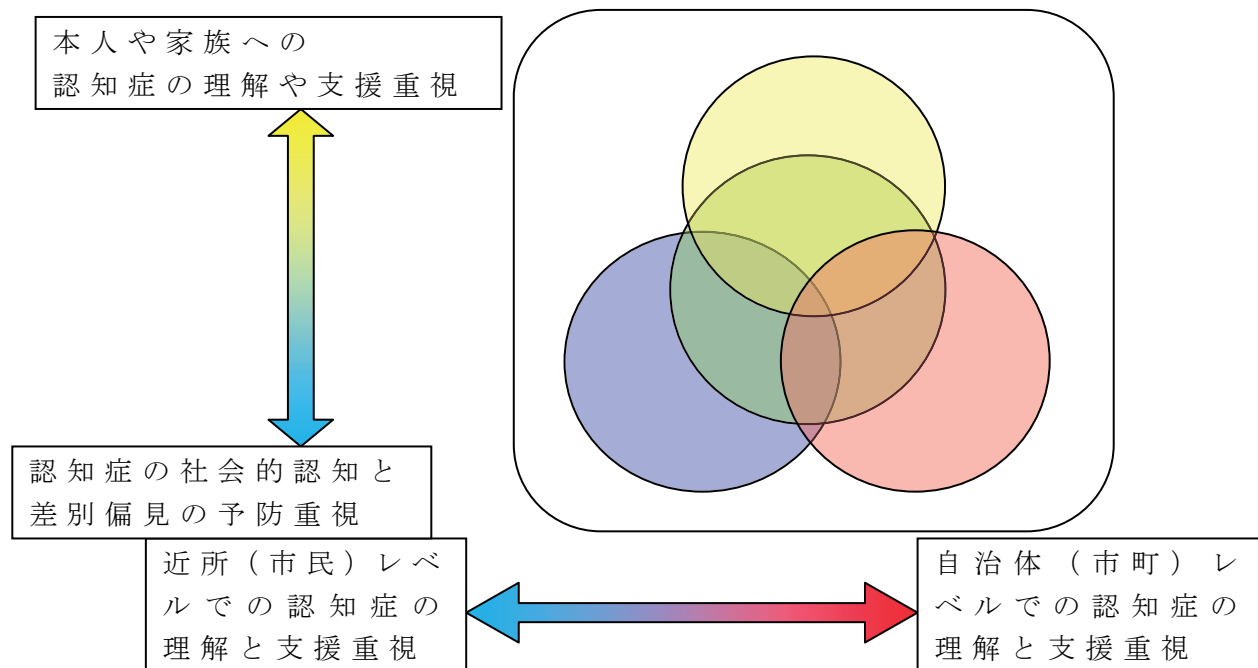


図2 カフェが重視している目的と類型図の関連

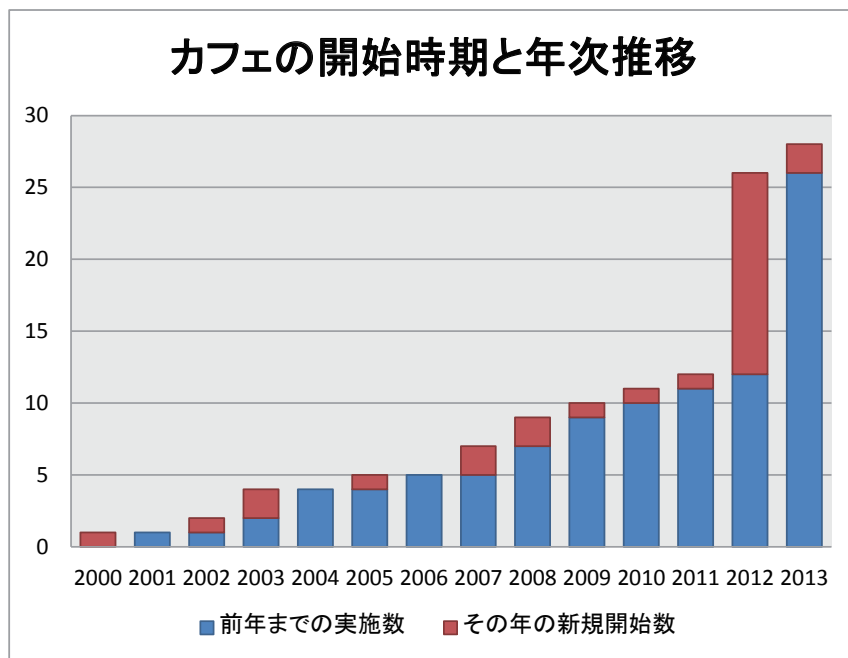


Ⅲ. 調査結果 (n=28 複数回答の場合は明記した。)

1. 開始時期

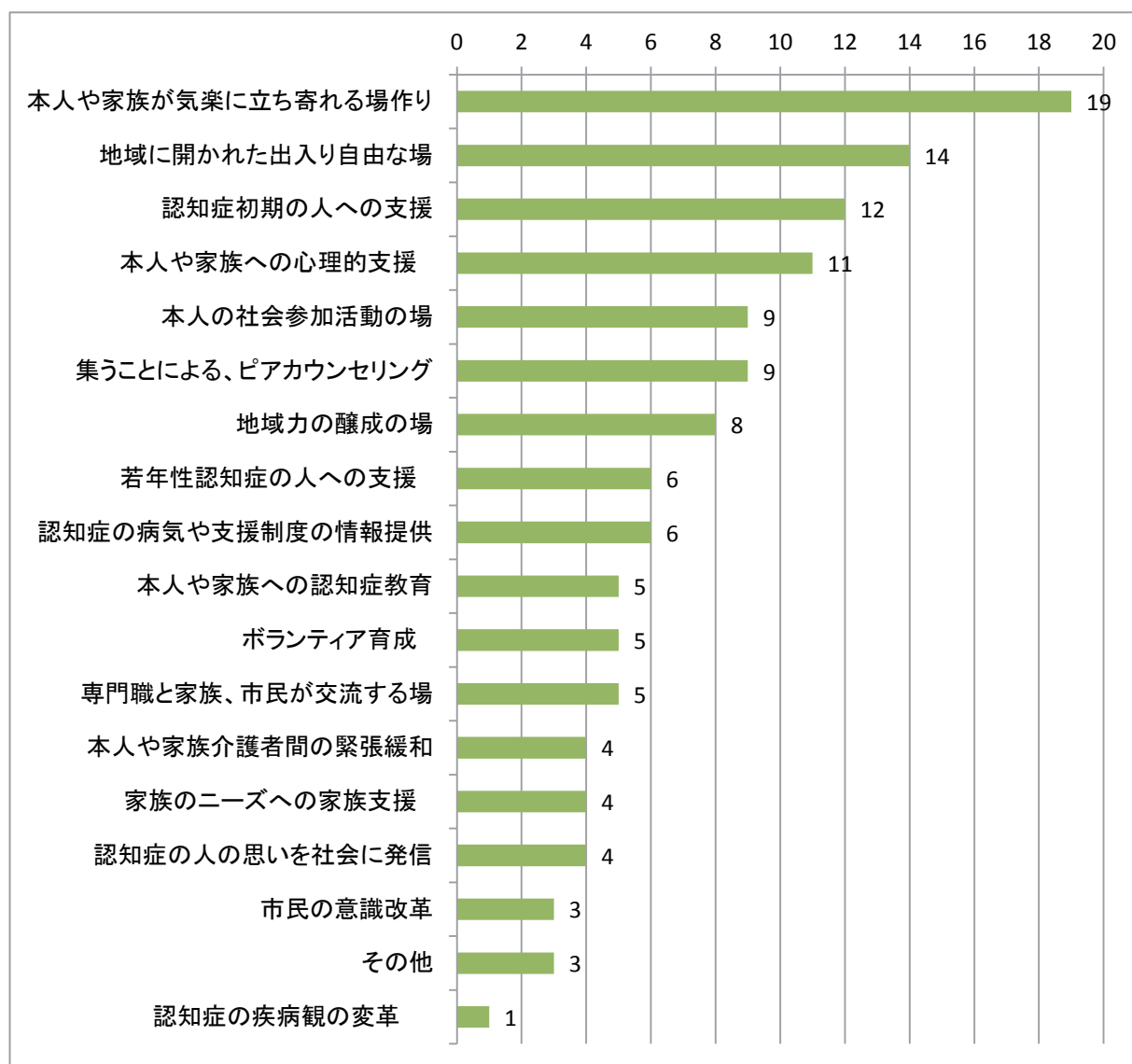
開始時期は、2000年～2013年と幅広いが、2012年に14か所が開設されている。

	前回までの 実施数	その年の新 規開始数
2000	0	1
2001	1	0
2002	1	1
2003	2	2
2004	4	0
2005	4	1
2006	5	0
2007	5	2
2008	7	2
2009	9	1
2010	10	1
2011	11	1
2012	12	14
2013	26	2
計	28	



2. 認知症カフェの目的はどのようなことか (5つ選択)

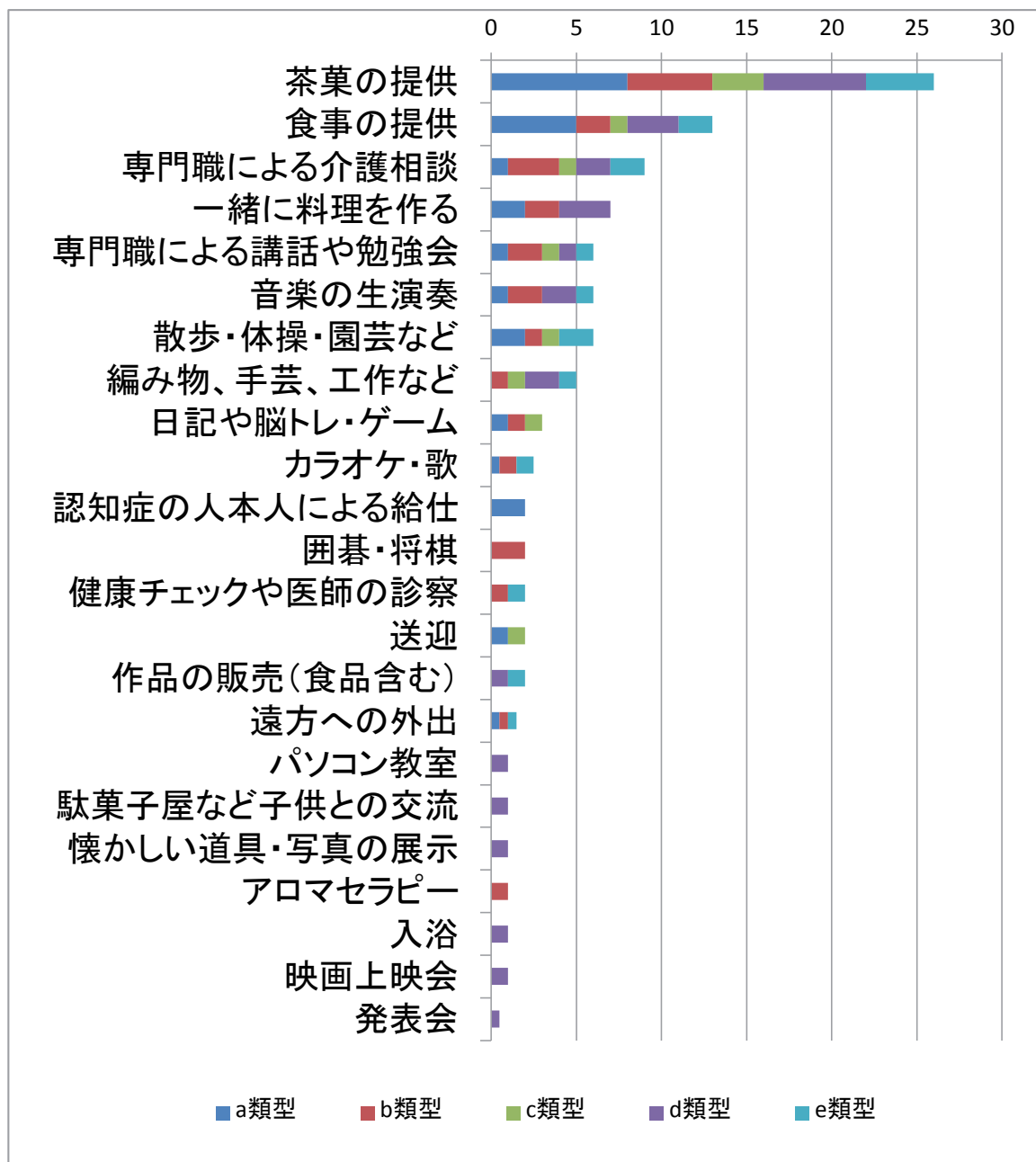
目的で最も多かったのは「本人や家族が気軽に立ち寄れる場づくり」で、次いで「地域に開かれた出入り自由な場」「認知症初期の人への支援」の順になっている。回答の中には、選択肢のすべてが目的としてあてはまるという意見もあった。



3. 認知症カフェで実施している内容

実施内容について自由記載された内容を整理した。

認知症カフェで実施している内容



認知症カフェで行われている内容は、バラエティに富んでいた（資料1を参照）。すべてのカフェで茶菓が提供されていたのはもちろんであるが、食事の提供も合わせて行っているカフェが13か所あった。食事を提供することにより、利用する人の心も体も満たすことが認知症カフェにおいて重要視されていると言える。次いで多かったものとして「専門職による介護相談」（10か所）、「専門職による講話や勉強会」（7か所）であった。これらは認知症カフェの一つの機能として専門職による情報提供があることを裏付けている。また、料理教室などで「一緒に料理を作る」（7か所）ことと共に、

認知症の人本人がスタッフとなって、飲み物や食事の給仕を行うという答えたカフェが2か所、認知症の人本人による講話を実施しているカフェが1か所あった。これらの中には認知症の人と社会をつなぎ、自信を持ってもらうとともに、カフェの目的として社会に認知症の人の思いを発信する場であると答えているものがあり、特に認知症の初期の人のニーズに合わせた内容であると思われる。

他、ミニコンサートなどの「音楽の生演奏」(7か所)、散歩や体操、園芸などの運動系アクティビティ(6か所)、編み物、手芸などのクラフト系アクティビティ(5か所)、「日記や脳トレ・ゲーム」「カラオケ・歌」(各3か所)、「囲碁・将棋」(2か所)、「映画上映」(1か所)といった、デイケアやデイサービスでも提供されている内容のものがあった。中でも編み物や手芸などのクラフト系のアクティビティでは、認知症の人が教える側となって一般市民と交流していると合わせて答えたカフェがあった。単にアクティビティを提供するのではなく、人との交流も狙っている点で、既存の通いの施設とは異なる面があると言える。

他、少数であるが、「パソコン教室」を行っているカフェがあり、これも初期の認知症の人にとっては、インターネットを介して社会とつながるツールを得ることにもなり得、認知症カフェならではの内容であると思われる。また、回想法的效果を狙って「懐かしい道具・写真の展示」を行っていたり、地域と交流する方法の一つとして駄菓子屋を併設して子供との交流を図っていたり、親しみやすい空間であるからこそ提供できると思われる内容もあった。さらに、より多くの人に利用してもらうために送迎を行っていたり、入浴を提供しているカフェもあった。

どの認知症カフェでも、海外の取り組みや国内の先駆的な例を参考にしたり、独自のアイデアをもとに、様々な内容が提供されていた。これらはカフェ開設にあたっての理念をもとに、人同士が認知症カフェという場でつながるための仕組みであった。各所により様々であるが「自分たちのしたい事を決めて実行していく」と書き添えていたカフェがあった通り、どれも利用する人がやりたいときにやりたいことやものを選ぶことができるという所もあった。また、その日に予定されていなかったとしても利用する人がアイデアを出し合って新たな内容を開発していけるという所もあった。認知症カフェが自由でゆるやかな場であることが、内容に関する調査の結果でもうかがえた。

4. 認知症カフェの効果

認知症カフェを実施して感じている効果や変化について、対象者ごとに自由記載で答えてもらった内容を質的に分析し表に示した。分析方法は記述内容を意味に沿って一文ずつ区切り、対象ごとに分類した上で内容ごとに項目にわけた。認知症の本人に対する効果、家族に対する効果、地域住民に対する効果については、項目をさらに大きなグループにわけた。ここでは主な項目を列挙するが、調査票に記述された言葉を含めての詳細は後述のまとめに記載する。

1) 認知症の人と家族の両方への効果

①	認知症の人と家族が同じ空間で出会いつつもそれぞれの横のつながりを形成し強化する場となっている
②	食事を摂るという基本的欲求を満たし、おいしさを介して元気をもらう場となっている

2) 認知症の人本人に対する効果

<認知症の人の心身を満たすことによる効果>

③	コーヒーを飲んで一服できるスペースがあったり話を聞いてくれる人がいたりすることで、認知症の人が明るく笑顔になれる場となっている
④	認知症の人が様々な人と出会い、生きがいを感じられたり、懐かしいものにふれたりすることで症状の進行を緩やかにすることが期待できる場となっている。
⑤	認知症の人が民家などを利用した親しみやすい空間で自由に過ごし、リラックスできる場となっている

<認知症の人と社会がつながることによる効果>

⑥	認知症の人が社会的つながりや役割を得てやりがいを感じることで笑顔になり、生き生きと過ごせる場となっている
⑦	認知症のために閉じこもりがちとなった人が他者との会話や趣味的活動を通じてまだできることがあると発見し、自分らしさを取り戻せる場となっている
⑧	認知症の人が地域で暮らし続けられるための居場所になっている
⑨	施設に入所している認知症の人がくつろぎ、社会との接点を持つ場となっている

<認知症の人とケアが会うことによる効果>

⑩	若年性認知症や認知症初期で既存の介護保険サービスになじめない人や認知症と告知されていない人、認知症の病識が不十分な人の支援の場となっている
⑪	認知症ケアの入り口となり、行政のサービスにつながる場となっている
⑫	認知症の人が軽度の時から関係をつくることでその人の気持ちを理解した適切で継続的なサポートができる場となっている

3) 家族に対する効果

<介護する家族同士が出会うことによる効果>

⑬	介護する家族が悩みや思いをはきだし泣くことで、明るくなることができ、安心感が生まれる場となっている
⑭	介護する家族が仲間に出会ってつらいのは自分ひとりだけではないということを実感し、仲間づくりにつながる場となっている
⑮	介護する家族同士が語り合うことで、実体験に沿った介護の工夫を学び取る機会となる

<介護する家族と認知症の本人が出会い直すことによる効果>

⑯	介護する家族が本人と離れて息抜きできる安らぎの場となっている
⑰	介護する家族が本人のよい状態を見ることで、穏やかになり認知症の人との間の緊張感が緩和される場となっている
⑱	介護する家族が認知症の人の普段と違う姿や第三者の認知症の人への関わり方を見て理解を深める場となっている
⑲	認知症の人を抱える家族が家族としての機能を維持するために家族内で認知症についてオープンに語るきっかけを与える場となっている

<認知症の人と離れて暮らす家族にもたらす効果>

⑳	認知症カフェに認知症の人が通うことで遠く離れた家族も安心できる
---	---------------------------------

<介護する家族が専門職と出会うことによる効果>

㉑	介護サービス等の情報を家族が気軽に得られる機会となる
---	----------------------------

4) 地域住民への効果

<地域住民と認知症の人が出会うことによる効果>

㉒	地域住民にとって認知症を自分の近い将来のこととして身近に考える雰囲気生まれるきっかけとなる
㉓	地域住民が認知症の人と出会い、同じものを飲み、食べ、会話することで認知症が特別な病気でないことを知る場となっている
㉔	認知症の人と地域住民が出会い、交流する場になっている

＜地域住民同士が会うことによる効果＞

②⑤	世代や障害を越えた住民同士が生活の一場面として交流し、横のつながりが形成される場になっている
②⑥	地域住民が誰でも立ち寄れるくつろぎの場となっている

5) 支援する医療・介護専門職への効果

②⑦	医療・介護専門職が認知症の人の強みに気づき、自身の認知症ケアを振り返る場となっている
②⑧	医療・介護専門職が地域住民や地域で暮らす認知症の人と会うことで認知症ケアを通じた地域づくりを考えるきっかけとなる
②⑨	医療・介護専門職と介護する家族・認知症の人が同じ立場で交流できる場となっている

6) 支援する市民ボランティアへの効果

③⑩	市民ボランティアが認知症の人とかわることで理解を深める場となっている
③⑪	市民ボランティアが効果を実感し、喜びややりがいを感じる場になっている

7) 社会や地域への効果

③②	地域包括支援センターや社会福祉協議会などの関係団体に活動が伝わることで、地域のネットワークづくりや連携強化につながる
③③	誰でも集える場となることでコミュニティの雰囲気をも明るくする
③④	マスコミに取り上げられることで社会全体の認知症への注目を集める

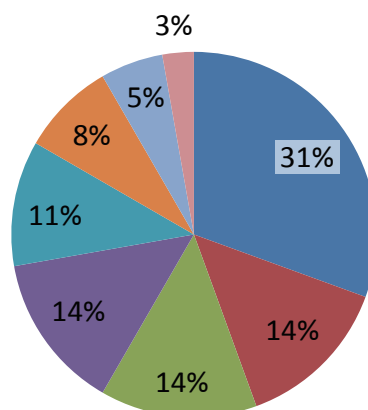
5. 認知症カフェの運営母体

運営母体で最も多かったのはNPO法人で、次に社会福祉法人とその他であった。

NPO法人	11
社会福祉法人	5
その他	5
当事者	5
市町村	4
回答なし	3
医療機関	2
医師	1
都道府県	0

(複数回答の施設 = 4)

運営団体

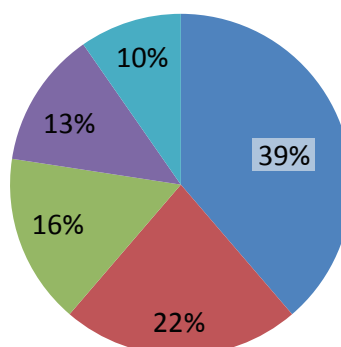


6. 認知症カフェの活動場所

活動している場で最も多かったその他には、つどいの場として建てられた一軒家や、団地の集会所という回答が含まれている。

その他	12
病院施設	7
民家	5
店舗	4
行政社協	3

カフェの活動場所



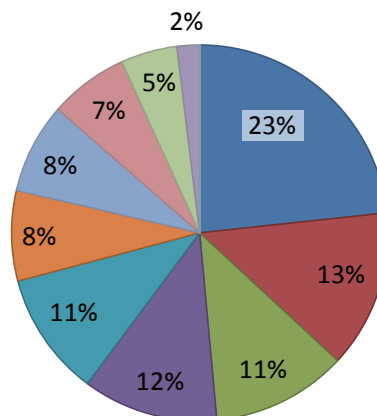
7. 支援スタッフの職種

支援スタッフは全体の累計で市民ボランティアが最も多かった。

市民ボランティア	24
介護職	14
家族会	12
認知症サポーター	12
医療職	11
行政社協職員	8
その他	8
福祉職	7
医師	5
民生委員	2
老人福祉員	0

(複数回答の施設 = 24)

支援スタッフの職種

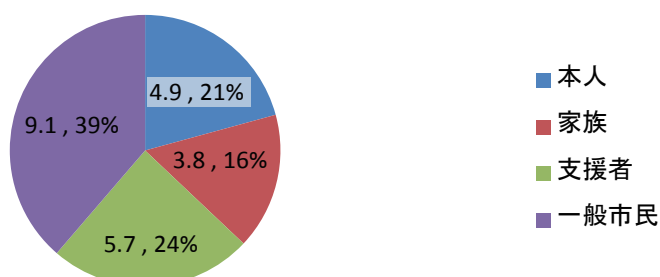


8. カフェ参加者の内訳

カフェ1回あたりの平均利用者の内訳である。

(※各カフェ1回の参加人数／カフェの数で算出)

カフェ参加者内訳 全体平均 (人, %)

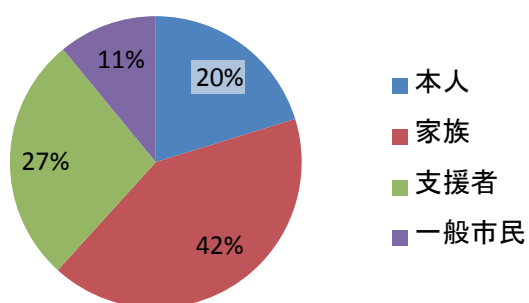


	本人	家族	支援者	一般市民
カフェ参加者内訳 (全体平均)	4.9	3.8	5.7	9.1
a 類型の参加者内訳 (平均)	4.0	8.2	5.4	2.2
b 類型の参加者内訳 (平均)	6.8	2.6	5.8	4.3
c 類型の参加者内訳 (平均)	1.8	2.0	3.0	9.3
d 類型の参加者内訳 (平均)	5.1	2.1	5.7	17.2
e 類型の参加者内訳 (平均)	数値回答なし			

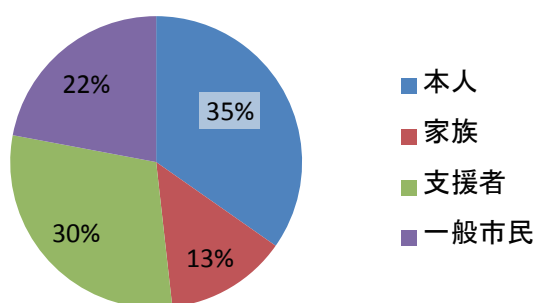
この表とグラフは、e 類型のカフェの回答が、「曜日で異なる」「無回答」などであったため、a～d 類型の平均値で示している。

以下、類型別の参加者を示す。

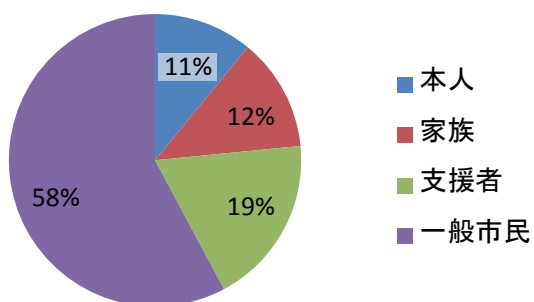
a 類型の参加者内訳(平均)



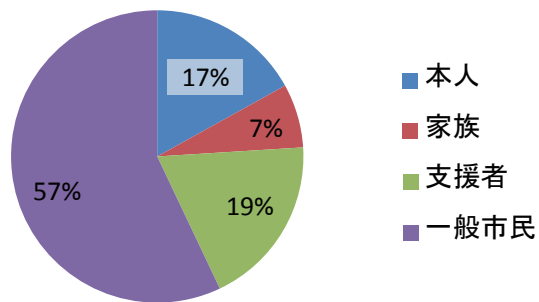
b 類型の参加者内訳(平均)



c 類型の参加者内訳(平均)



d 類型の参加者内訳(平均)

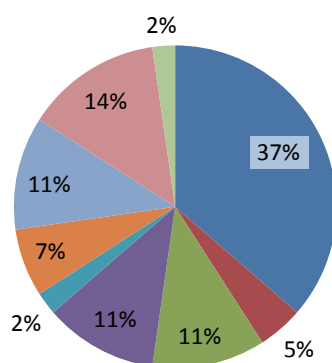


9. 本人の参加条件

制限無し	16
MCI	2
軽度認知症	5
中度認知症	5
重度認知症	1
その他の重症度	3
年齢	5
その他	6
回答なし	1

(複数回答の施設 = 6)

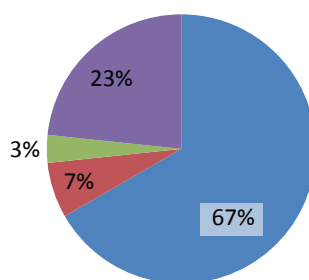
本人の参加条件



10. 市民の参加条件

制限無し	20
民生委員	2
認知症サポーター	1
その他	7

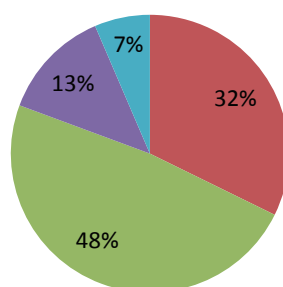
市民の参加条件



11. 利用者の負担

会費制	0
1回毎	10
実費	15
その他	4
無料	2

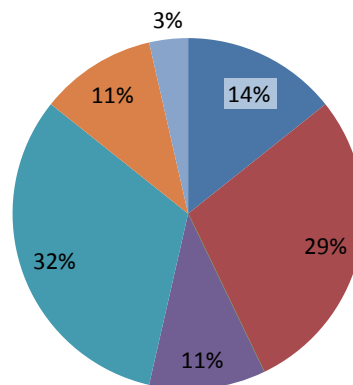
利用者の負担



12. 年間のカフェ運営費用

10万円未満	4
10～50万円	8
50～100万円	0
100～200万円	3
200万円以上	9
その他	3
回答なし	1

年間の運営費用

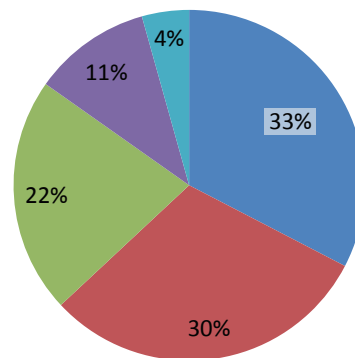


13. 運営費の財源

自己資金	15
本人負担	14
助成金	10
その他	5
回答なし	2

(複数回答の施設 = 16)

運営費の財源



Ⅳ. まとめの文書

1. 認知症カフェが始まった背景

認知症カフェは、イギリスのメモリーカフェやオランダのアルツハイマーカフェのような役割を期待して打ち出されたものであろう。日本における認知症カフェとはどのようなものか、という実態を調べるために今回の調査を行ったが、実態は様々であったと言える。従って、本報告書では、今回調査したカフェやつどい場において共通している、あるいはそこから導き出される要素をもとに「我が国の認知症カフェ」のあり方と運営を提示することを目的とする。

日本において、いわゆる「まちの縁側」「地域の茶の間」といわれる「コミュニティカフェ」が各地につくられ始めたのは2000年代になってからと思われる。コミュニティカフェの先行例として有名なのが1997年に開設された新潟市の「地域の茶の間」（2003年に空き家を利用した宿泊可能な「うちの実家」に移行）である。このような近年の地域づくりの動きは、介護保険制度の開始とともにあるとも言え、社会福祉制度での縦割りサービスでは形成することのできない横のつながりを、民間が住民の手で作り出してきたと言える。また、病気、障害、年齢、性別、職業といった背景や立場を超えて、人々が暮らしやすい社会をつくる動きとしてとらえることもできる。

一方、これに先立つ1980年1月、呆け老人をかかえる家族の会（後に「認知症の人と家族の会」に改名）が発足した。介護保険制度はもちろん、呆け老人に対する理解も皆無に等しかった時代のことである。会では、電話相談や会報発行に並んで、介護者が誰にも言えない辛い悩みを打ち明け、同じ立場の人からアドバイスを受けられる場として「つどい」が開催され、以後30年以上にわたり現在も続いている。また、本人と家族が一緒に利用できる場として、本人のつどいも行ってきた。このようなつどいは、開催場所は地域住民に開かれた場所ではないものの、会員以外の人でも参加可能なつどい場として、本人や介護者が気兼ねなく思いを打ち明けられる場として機能してきた。

このたび6.18文書に打ち出された内容では、「認知症カフェ」を、認知症ケアのひとつとして位置付けることを意味する。これは、前述したような民間での取り組みが継続されてきたことに対するひとつの評価であり、このような取り組みを、重要なケアの仕組みとして国が真剣に後押しをし始めたということの意味するように見える。認知症カフェがそのような動きの具体的事例として全国に広がることが期待される。

2. 認知症カフェとはどんな場であるのか

今回調査を進めていく中で、認知症カフェでは、認知症の本人が生き生きと過ごし、家では見せなかったような表情で過ごしていることが分かった。同じ空間で「家では見せない姿」を家族は目にする。このことで、家族は日常の介護を振り返り、本人との向き合い方にも変化が生じるという効果を及ぼしていることが分かった。また専門職にとっても、仕事で接している時とは異なる本人の姿を見る場であることも分かった。

認知症カフェはこのような本人と家族の関係性の様式やパターンを変えるようなものとして機能する一面があると考えられる。つまり、家族と本人、そして地域、専門職が出会い直しをする場として機能する可能性がある。

<認知症カフェの要素7つ>

【要素1】 認知症の人が、病気であることを意識せずに過ごせる。

【要素2】 認知症の人にとって、自分の役割がある。

【要素3】 認知症の人と家族が社会とつながることができる。

【要素4】 認知症の人と家族にとって、自分の弱みを知ってもらえていて、かつそれを受け入れてもらえる。

【要素5】 認知症の人とその家族が一緒に参加でき、それ以外の人に参加・交流できる。

【要素6】 どんな人も自分のペースに合わせて参加できる。

【要素7】 「人」がつながることを可能にするしくみがある。

認知症カフェとはどんな場であるのかについて以上7つの要素があると考えられた。これらの要素が、実際に認知症カフェとして機能している場合、いくつかの特徴として表現することができた。これを認知症カフェ10の特徴として列挙する。様々な実践例から導き出された特徴であるが、上記7つの要素を含めもっているからこそ、そこを利用する人にとって意味のある特徴となっている。

＜認知症カフェ 10の特徴＞

1. 認知症の人とその家族が安心して過ごせる場
2. 認知症の人とその家族がいつでも気軽に相談できる場
3. 認知症の人とその家族が自分たちの思いを吐き出せる場
4. 本人と家族の暮らしのリズム、関係性を崩さずに利用できる場
5. 認知症の人と家族の思いや希望が社会に発信される場
6. 一般住民が認知症の人やその家族と出会う場
7. 一般の地域住民が認知症のことや認知症ケアについて知る場
8. 専門職が本人や家族と平面で出会い、本人家族の別の側面を発見する場
9. 運営スタッフにとって、必要とされていること、やりがいを感じる場
10. 地域住民にとって「自分が認知症になった時」に安心して利用できる場を知り、相互扶助の輪を形成できる場

安心して過ごせる場であることはもちろん、若年認知症や認知症の初期にある等、特にタイムリーで的確な支援を必要としている人に対しても、相談支援を行っている。また、認知症の人に拘わらず、社会の中で行き場のない人たちが過ごす場ともなっており、そこを利用することで引きこもり防止になっている事例もあった。このように、認知症カフェには様々な機能と要素があり、それぞれの場において特徴があった。

3. 考 察

以下、3項目について述べていく。

- 1) 認知症カフェの効果
- 2) 認知症ケアにおける、認知症カフェの意味
- 3) 認知症カフェの課題と今後

3- 1) 認知症カフェの効果

認知症カフェが及ぼす効果について、以下に述べる。

□は効果を及ぼす対象。○数字は項目、「」は調査票に記述された言葉、＜＞は項目をグループ化した名称である。分析方法はⅢ－4参照。

認知症の人と家族の両方への効果 ①②

①認知症の人と家族が同じ空間で同じ境遇の人と出会い、それぞれの横のつながりを形成し強化する場となっている

認知症の人も家族も認知症カフェという同じ空間で互いを意識しつつも、それぞれ同じ立場にいる仲間と出会うことで、家族ぐるみの付き合いに発展し、仲間を思いやるなどの横のつながりを形成、強化できる場となっている。

例)「仲間作り、仲間意識の芽生え：本人どうし、本人と他の対象者の家族、家族どうしの横の繋がりが強化される。欠席した対象者を気遣う言葉が聞かれている。」

「当事者同士や家族同士の関係が深まっていき、その関係はカフェの場を超えて勝手に拡大していく（電話で連絡を取り合う、送迎し合う、待ち合わせて一緒に食事をする、など）」

②食事を摂るという基本的欲求を満たし、おいしさを介して元気をもらう場となっている

生理的欲求が満たされないと、特に認知症の人においては不穏状態に陥ったり、BPSD が出現するなどの影響がある。さらに、本人も家族も食事すら落ち着いてできないほど認知症の症状に振り回され、空腹が満たされない結果、余計に症状を悪化させる悪循環に陥ってしまう場合もある。また、介護に忙しい家族は介護される人の食事のことはきちんとしていても、自分の食事にゆっくり時間をかけることはできず、おろそかになりがちである。食事を提供する認知症カフェでは、栄養バランスも味も良い食事を提供し、ゆっくり食事を楽しんでもらうことで、認知症の人や家族だけでなく利用する人やスタッフの基本的欲求を満たし、体を整え心を満たす場となっている。また、おいしい食事や茶菓子は、人々の語らいの良き媒介となっている。

例)「『食』に対するおろそかになっている事の改善。」

認知症の本人に対する効果 ③～⑫

認知症の本人に対する効果は10項目あり、＜認知症の人の心身を満たすことによる効果＞＜認知症の人と社会がつながることによる効果＞＜認知症の人とケアが会うことによる効果＞の3つのグループに分けられた。

＜認知症の人の心身を満たすことによる効果＞

③コーヒーを飲んで一服できるスペースがあったり話を聞いてくれる人がいたりすることで、認知症の人が明るく笑顔になれる場となっている

落ち着ける空間等の認知症カフェのハード面および人との関わりや提供される飲み物や食事によって、認知症の人が心安らぎ、明るい笑顔になれる。

例)「認知症の本人はとても楽しく『話を聞いてもらえる人がいる』という事で明るく笑顔で話されている。」

「一服できるスペースとしてコーヒーがあることで、硬い表情が和らいだ。」

④認知症の人が様々な人と出会い、生きがいを感じられたり、懐かしいものにふれたりすることで症状の進行を緩やかにすることが期待できる場となっている

認知症カフェに置かれた古い道具などを介して会話をすることは、認知症の人に対して回想法的效果が期待できる。また、認知症の人が様々な人と出会って役割を得、生きがいを感じることも、認知機能に良い影響を与えると考えられる。これらが、今後、認知症の進行を緩やかにしたり、BPSDの発現を防ぐ効果をもたらす可能性を秘めている。

例)「昔懐かしい写真、道具、お金、レコード等展示しているのを見ることにより、会話が弾んだり、記憶の呼び起こしの役割をしてくれるのでは?と考えている。」

「こういう場面をつくる（認知症の人同士の交流や、生きがいを感じられる場面をつくる）ことで、認知症の経過がおだやかに経過することを期待しています。」

「今後、データの検証を踏まえないと明らかでない面もありますが、BPSDの発現や精神科病院への入院などを防ぐ（効果）もあるのではないかと考えます。」

⑤認知症の人が民家などを利用した親しみやすい空間で自由に過ごし、リラックスできる場となっている

認知症カフェの多くは民家を利用したり、既存のレストランやカフェ、介護施設のリビングなどを利用したりと、病院とは異なる親しみやすい空間づくりをしている。そのような空間で決められたプログラムなどなく自由に過ごすことにより、認知症の人が心身共にリラックスできる場となっている。

例)「民家であることによって落ち着く。リラックスできる。トイレの回数が多い人が1回だけなど。」

「カフェに居る間、当人の方達は落ちつかれている様子が見られる。」

「和風民家（庭にテラスを作った）の好きな場所に居ることができる。」

<認知症の人と社会がつながることによる効果>

⑥認知症の人が社会的つながりや役割を得てやりがいを感じることで笑顔になり、生き生きと過ごせる場となっている

認知症カフェで様々な人と出会い、関わることで趣味など得意にしていたことを誰かに教えたり、時にはスタッフとしてお茶を出したりすることで、責任感や役割が生まれ、できることがある事に気付き、生きがいに繋がる。

例)「本人のできることを中心にしているため、教える立場になっていただくと、とても誇らしげにされ、楽しそうに過ごされています。」

「本人は社会的つながりや役割を得て笑顔が出、『この会には来たい』ということが多い。」

「地域の人や近隣の人とのつながりを持つことにより、本人のやりがいや社会参加につながる。」

⑦認知症のために閉じこもりがちとなった人が他者との会話や趣味的活動を通じてまだできることがあることを発見し、自分らしさを取り戻せる場になっている

認知症のためにできないことが増え、外出先での失敗を恐れて閉じこもりがちになってしまった人が、認知症カフェで出会う人々となじみの関係を作り、共に会話しながらお菓子作りなどの趣味的活動をする事で、まだまだできることがたくさんあることに気付くことができ、自分らしく過ごせる場となっている。

例)「閉じこもりの防止：独居の人もあり、他者とつどい、言葉を交わす機会となっている。」

「まず本人への効果として、家に閉じこもる状態や生活が縮小しかけた状態を解消する効果があります。それは単にカフェという場所に出てくるという物理的なことも関係しますし、そこで会話や趣味的な活動を通じて自分らしさを取り戻すことも含めて、認知症が始まったことや、家族の間で生まれてきた葛藤を緩和して、生活範囲の縮小を解消する効果につながっているように感じます。」

「ひとりでは『できない』ために暮らしにくくなって閉じこもり、生活に不安を抱くことの方が多かったのに、デイを利用している人と一緒にパンやケーキを焼いて食べたり、話をする中で表情に明るさを取り戻した方や、できなかったことが実はできるのだと発見することもあった。」

⑧認知症の人が地域で暮らし続けられるための居場所になっている

認知症カフェということを特に意識せず、コミュニティカフェとして認知症の人でもそうでない人も同じコミュニティの一員として暮らし続けられる居場所を目指している。

例)「認知症カフェとしての取組みというよりも、同じ人として地域の中で暮らし続けられる居場所として考えている」

⑨施設に入所している認知症の人がくつろぎ、社会との接点を持つ場となっている

グループホームなどの施設で暮らしている人が施設を一步出て認知症カフェでくつろぐことは、行事などでの地域の人との関わりとは異なる日常的な接点を社会と持つことにつながる。

例) 隣のグループホームに面会のご家族が本人さんとくつろぐ姿がある。

<認知症の人とケアが会うことによる効果>

⑩若年性認知症や認知症初期で既存の介護保険サービスになじめない人や認知症と告知されていない人、認知症の病識が不十分な人の支援の場となっている

病院や施設とは異なるカフェという親しみやすい空間の中で利用する人に合わせた柔軟な対応が可能なので、若年性や初期の認知症の人、認知症と告知されていない人なども利用でき、既存の介護保険サービスにはなじまないこれらの人々の支援の場となっている。

例) 「当初は若年の本人と家族のみに限っていたが、初期診断の普及により早い段階での診断を受けた認知症高齢者と家族で現在の介護保険サービスになじめない方々、認知症への病識や理解が、不十分な方々も参加してもらうようになっている。」

「認知症の入り口と思われる方の参加のある時もある。」

「未告知の方は、スタッフが間に入り、家からの送迎を行うことにより、皆さんの輪の中にスムーズに入ることができ『また来たい』と言っていただくことができた。」

事例1 認知症カフェでケアマネと出会い、デイサービスにつながった A さん

70歳代の A さんは元会社社長で奥様と二人暮らしです。アルツハイマー病と診断され、要介護1の認定を受けています。

娘さんから、家族の会の支部に「母親が介護に疲れている」「対応をどうしていいのかわからない」という内容の相談がありました。A さんは息子に譲った会社に今も通っており、介護保険サービスは拒否しているとのこと。認知症カフェへの参加を勧めたところ、介護者である奥様と二人で参加され、「あの会がいい」と気に入り、奥様も「話を聴いてもらえた」、「他の家族の話を聴いていろいろあるのだと思った」と、認知症カフェへの参加を続けました。

カフェへの4回の参加を経て、認知症カフェで出会ったケアマネジャーが A さんの左足の不都合さに気づき、A さんも気にしていることから、自宅を訪問しリハビリをすすめました。A さんの同意を得てリハビリを積極的に行っているデイサービスの見学と、お試し利用を経てリハビリ目的での週1回のデイサービス利用を開始しました。

現在では週3日はデイサービス、週3日は会社に通う日々を送っており、認知症カフェへも喜んで参加されています。デイサービスでリハビリすることで左足の調子もよくなりました。奥様は認知症カフェで同じように介護されているご家族と交流して、少しずつ認知症を理解され、A さんへの対応に自信を持てるようになりました。また、デイサービスの利用でゆっくりできる時間が増えました。息子さんご夫婦もそんなご両親の様子を見て、認知症への理解が深まったそうです。

⑪認知症ケアの入り口となり、行政のサービスにつながる場となっている

認知症かもしれないと悩む人や家族が行政の窓口に行くことを躊躇していても、認知症カフェならば気軽に訪れることができ、介護経験者や医療・介護専門職に相談することが可能なので、行政サービスや早期支援につなげられる場となっている。

例)「一度利用した人(地域住民)が相談する場所として当事者に紹介するようになった。」
「利用する人の変化等も汲み取ることができ、社協、保健師等連絡し解決している。」
「カフェに来られた方からの相談で、地域包括支援センターにつないだ方がいる。」

事例2 認知症カフェでケアと出会った若年性認知症のBさん

Bさんは60歳代の元技術者で奥様と二人暮らしです。奥様より、「夫が定年後物忘れがひどく病院を受診したところ、若年性認知症と診断されたが本人に自覚がなく困っている」と家族の会に電話で相談がありました。奥様は、受診先の病院で受けた対応やアドバイスについて今一つ納得できないとも話されていました。

奥様は家族のつどいに参加してみましたが、若年性認知症に特化した認知症カフェの方が良いと考えたことと、「Bさんは到底認知症カフェのような場にはこない人である」と判断されたことから、まずは自分だけで認知症カフェに参加されました。

奥様がカフェに参加して半年が過ぎたころ、「家族の会」のリフレッシュ旅行にBさんも一緒に参加されました。旅行中、Bさんは奥様が驚くほど他の参加者と仲良くくつろいでいらっやいました。このことをきっかけに認知症カフェへもBさんと奥様の二人で参加するようになりました。

認知症カフェで得た情報から、受診先を認知症疾患医療センターに変え、Bさんは改めてアルツハイマー病と診断されました。要介護1の認定を受け、デイサービスにも通うようになりました。現在は、要介護2となり、週6日デイサービスに通っておられます。Bさんは「老人会へ行っている」と認知症カフェにも喜んで参加されています。奥様はカフェへの参加を通して認知症をより深く理解され、現在では介護を始めたばかりのご家族へアドバイスをするようになりました。

⑫認知症の人が軽度の時から関係をつくることでその人の気持ちを理解した適切で継続的なサポートができる場となっている

敷居の低い認知症カフェでは認知症の早期から通うことができ、なじみの関係を作ることができる。また、自由で柔軟な対応が可能であるので、重度認知症となっても工夫次第で対応可能である。このように初期から関係を作ることで、重度となっても認知症に障害されないその人を知る手掛かりが得やすく、継続的なサポートが可能な場となっている。

例)「軽度の時から関係を作れるので、『その人』を知る手がかりを得やすい。サポートが『その人』の気持ちを知った上で取り組める。」

「中核症状の進行により、時間とともにできなくなることはあるが、それまでを知っているサポーターが適切にサポートすることで、参加を継続できている。」

事例 3 認知症カフェに相談し、介護保険サービスにつながった C さん

C さんは独り暮らしの女性です。認知症カフェとの出会いは隣の市に住む弟さんの電話がきっかけでした。ある特別養護老人ホームが運営している認知症カフェの存在を知った弟さんは、電話で「姉の様子がおかしい。家の中が散らかっていたり、一人できないことが多い、よくこけたりしている」と認知症カフェの担当者に話されました。

後日、認知症カフェに C さんと弟さんご夫婦が参加されました。参加の動機の一つに、カフェを運営している特養の施設もついでに見たかったということもありました。認知症カフェで弟さんは、自分が C さんを引き取って住もうか、どうするか悩んでいると話されました。相談を受けた専門職は、介護保険制度の仕組み、特養や他の施設との違い等をお伝えし、あわせて地域包括支援センターの連絡先を紹介しました。また、C さんたちに了承を得て、地域包括支援センターにこれらの相談があったことを伝えました。さらに後日、認知症カフェから、運営法人のパンフレットや地域包括支援センターの連絡先、カフェの担当者の名刺などの資料を自宅に郵送しました。

その後、C さんは要介護認定を受け、ケアマネジャーにグループホームを勧められ、認知症カフェの母体の法人が運営するグループホームに申し込みました。入所までの間は、デイサービスを使いながら一人暮らしを続けました。後日、認知症カフェにサービスの説明をしてもらったり、色々と紹介をしてもらったりした事に対する感謝の手紙が認知症カフェに届きました。

家族に対する効果 ⑬～⑳

家族に対する効果は9項目あり、＜介護する家族同士が会うことによる効果＞＜介護する家族と認知症の本人が会い直すことによる効果＞＜認知症の人と離れて暮らす家族にもたす効果＞＜介護する家族が専門職と会うことによる効果＞の4つのグループに分けられた。

＜介護する家族同士が会うことによる効果＞

⑬介護する家族が悩みや思いをはきだし泣くことで、明るくなることができ、安心感が生まれる場となっている

介護する家族が認知症カフェで出会った人々に、思いや悩みをはきだし、十分に聞いてもらうことで気持ちの整理ができて明るくなれる場となっている。また、カフェには専門家もいるので、時には介護の情報を得たり、行政につないでもらったりすることで安心感も生まれる。

例)「一人で抱えていた思いをはき出し、泣きもするが帰る頃にはお茶を飲み、菓子を食べて笑顔で帰る。」

⑭介護する家族が同じ立場にある家族に出会い、つらいのは自分ひとりだけではないということを実感し、仲間づくりにつながる場となっている

家族交流会のようにかしこまらず自由な時間と空間のなかで、同じ境遇で悩む家族に出会って話することで、自分だけがつらい思いをしているのではないと実感し、仲間づくりにつながる楽しみの場となっている。

例)「家族の方達は、同じ立場の人達とゆっくりコーヒー等飲みながら話し合われていて、次回を楽しみにしてくれている様子。同じ仲間に会える楽しみが生まれているのかと思います。」
「同じ環境や境遇の人達が集うことによる、1人ではない安心感と相互のアドバイスで仲間づくりにつながっている。」

⑮介護する家族同士が語り合うことで、実体験に沿った介護の工夫を学び取る機会となる

同じ境遇のものが集い語り合うことで、市販の本などでは得られない、生活の実情に沿った工夫等の介護の情報を交換できる場となる。

例)「各自問題点や悩み事が解消された。」
「家族のつどいでは同様の状態の人を知って、介護経験を語り合い、悩みを共有できたことを喜び、工夫などを学びとる」。

<介護する家族と認知症の本人が出会い直すことによる効果>

⑯介護する家族が本人と離れて息抜きできる安らぎの場となっている

認知症カフェという自由な空間では、介護する家族と認知症の人が一緒に訪れたとしても、それぞれが違う人と話し、のびのびとすごすことができる。時には認知症の人にカフェで過ごしてもらっている間に、介護する家族が用事をすませに他の場所へ行くこともある。このように介護保険サービスのような制約が少ない緩やかな関係の中で、家族は息抜きができ、安らげる場となっている。

例)「本人と離れて家族・市民と語りあえる。」

「街中でなく、はずれにあることで息抜きできると言って、姑を介護するお嫁さんが来て、いっぱいお喋りして帰られる。」

「軽い認知症の人であれば、介護している人が用事などしたい間、長い時間は無理だが、カフェで預かる場合もあったりする。」

「ゆったりした空間で、伸びのび過ごしていただくことにより、身心をリフレッシュしていただきたい。」

「認知症の診断を受けて、暗くなっていたが、少し先が明るくなった様に思うと言われた。」

「泣ける場であり、情報が得られる為の安心感。」

「あせりや困惑が、話す事、行政につなぐ事で安心感が生まれる。」

⑰介護する家族が本人のよい状態を見ることで、穏やかになり認知症の人との間の緊張感が緩和される場となっている

介護する家族が認知症の人と同じ空間にいながら少し離れたところから見守りつつ共にすごすことのできる認知症カフェでは、第三者と関わっている普段と違う認知症の人の一面に家族が出会えることにより、それまでの一対一の緊張した関係が緩和される場となっている。

例)「本人のよい状態をみることで、家族もおだやかになれる。」

「家族への効果として、本人の生活の縮小を残念に思う気持ちが緩和されること、物忘れが始まり同じ話の繰り返しが続く本人と接する時間が多くなることからくる緊張感の緩和」

⑱介護する家族が認知症の人の普段と違う姿や第三者の認知症の人への関わり方を見て理解を深める場となっている

家族が認知症の人とともにカフェに参加することで、普段はあまり見られない認知症の人の笑顔や、ほかの参加者の関わり方を見て自身の認知症の人への関わり方を振り返り、認知症の人や介護への理解が深まる場となる。

例)「本人のできること、笑顔に接することと、家族同士のピアカウンセリングにより認知症の理解や、関わり方、心の持ち方等を学習し、その結果本人の症状も落ち着くといった状態に結びついている。」

「中核症状の理解や、周辺症状の接し方。」

⑲認知症の人を抱える家族がその機能を保つために家族内で認知症についてオープンに語るきっかけを与える場となっている

家族が認知症になると家族同士の関係に微妙な変化が生じ、家族の中での会話や相談、生活の維持などの家族としての機能が損なわれるリスクにさらされる。しかし、認知症カフェに参加することで認知症をいろいろな面からとらえることができ、家族のなかで認知症についてオープンに語るきっかけとなって、家族としての機能を保つことにつながる。

例)「家族としての機能(家族同士で会話する・相談する・生活を継続するなど)がたもたれるのではないかと考えています。」
「家族間で認知症について話しやすくなったと聞く。」

＜認知症の人と離れて暮らす家族にもたらす効果＞

⑳認知症カフェに認知症の人が通うことで遠く離れた家族も安心できる

独居の認知症の人の家族にとって、認知症カフェのようにいつでも認知症の人が通えて心安らげる場の存在は、遠方に住んでいても誰かが見守ってくれている安心感を得ることができる。

例)「遠く離れた家族も安心できるとの声もある。」

＜介護する家族が専門職と出会うことによる効果＞

㉑介護サービス等の情報を家族が気軽に得られる機会となる

認知症カフェには医療・介護の専門家がいるので、普段は介護に忙しい家族も認知症の人と訪れたついでに、気軽に介護サービスなどについて相談でき、情報が得られる場となる。

例)「日々の介護におわれ、介護保険の各種サービス内容や地域の社会資源、行政で行なっている情報を知る機会がなかったと言われる家族もいる。」
「喫茶スペースは、相談コーナーにも使われることがある。」

地域住民への効果 ㉒～㉔

地域住民への効果は5項目あり、＜地域住民と認知症の人が出会うことによる効果＞＜地域住民同士が出会うことによる効果＞の2つのグループに分けられた。

＜地域住民と認知症の人が出会うことによる効果＞

㉒地域住民にとって認知症を自分の近い将来のこととして身近に考える雰囲気生まれるきっかけとなる

誰でも参加できる認知症カフェにおいて、地域住民が認知症の人との出会いの体験を通じて認知症

について知ることは、講演会を聞いたり本を読んだりするよりもリアルな経験となり、認知症について身近なことであり、自分にも起こりうることであると考えるきっかけとなる。

例)「自分の近い将来のこととして関わるようになってもらっている。認知症のことが『自分のこととして胸に落ちてくる』という表現をされ、どう看取られるのがよいかなどを互いが真剣に考えるきっかけになっている。」

「ごく近所の人から始まって、認知症を身近に考える雰囲気生まれつつあるようにも思います。」

「ボランティアの募集をした所、10名以上の申込あり。カフェ開催に対する関心は高い。」

②③地域住民が認知症の人と出会い、同じものを飲み、食べ、会話することで認知症が特別な病気でないことを知る場となっている

認知症の人と地域住民が、認知症カフェを利用するものと同じ立場で出会い、同じものを飲み、食べ、会話することによって、地域住民が認知症の人を理解し、認知症の人も自分と同じ地域で暮らす人であり、特別な病気ではないのだと知る場となっている。

例)「実際に認知症の人たちと出会い、認知症を知ること。徘徊などの対応がわかることなど。怖れるような病気でないこと、特別な病気でないことを知る。」

「ある地域の方が云われた『普通の人だよ。たいしたもんだ』という言葉で表現されたように、認知症の人に対する見方があたたかいものに変化してきていると思います。」

「認知症の人と同じものを食べ、楽しく会話することで認知症の方の人としての魅力や多様性を知ってもらえる。」

②④認知症の人と地域住民が出会い交流する場になっている

認知症の人と地域住民が同じ地域に住む人として関わり、生活の中でのあたたかい交流が生まれる場となっている。

例)「独居の方や、軽い認知症の方が、お茶している横にその方が座って下さると、話しをしたり、笑顔を引き出していて、あたたかい気持ちの交流になっているように思える。」

「特別な場ではなく、普通の場所で、地域の方々と交流していただきたい。」

<地域住民同士が出会うことによる効果>

②⑤世代や障害を越えた住民同士が生活の一場面として交流し、横のつながりが形成される場になっている

調査したカフェの中には、認知症の人だけでなく障害を持つ人や、地域の子供、親など幅広い層が気軽に立ち寄れる場となっているところがある。それらのカフェでは閉じこもりがちの人が訪れたり、住民同士の交流が行われたりと、横のつながりが形成される場となっている。

例)「高次脳機能障害の人や視覚障害、中途障害（脳外傷）の人、子育て中の母子などが世代や障害を越えて集まりはじめた。」

「子供達も昼の駄菓子屋と昼のくつろぎの間が気に入ってくれているようだ。タイムスリップしたような気持ちになる、不思議な空間だと思っている。」

「地域で閉じこもりがちの人を誘うことで、外出につながった事例もある。」

②⑥地域住民が誰でも立ち寄れるくつろぎの場となっている

地域住民が散歩や買い物途中に気軽に立ち寄ってくつろげるので、休息や安心感をもたらす場となっている。

例)「散歩の途中に立ち寄り、お水を飲まれてまた家まで頑張って歩き出される。」

「地域の中にある『つどい場』——いつでも行ける所がある安心感。」

「認知症カフェに行けば、あまり人に邪魔されず、ゆっくり話ししながらお茶が飲める。」

支援する医療・介護専門職への効果 ②⑦～②⑨

②⑦医療・介護専門職が認知症の人の強みに気づき、自身の認知症ケアを振り返る場となっている

普段、施設で提供するサービスの枠組みの中で認知症の人と関わっている医療・介護専門職が、カフェという自由で開かれた場で生き生きと過ごす認知症の人と接することにより、認知症の人の強みに気づき、自らのケアを見直し向上させるきっかけの場となっている。

例)「『認知症の人でも、ちょっとしたアドバイスで出来ることがある』という認識が再確認されたと思います。」

「認知症の理解を深めるため、自己研鑽を積むようになった。」

「当事者の方と一緒にくんでカフェの仕事をする事で、認知症への理解の深まり、対応への工夫が生まれていると思う。」

「初期の方、若年性の方と接することにより、それぞれの今持っているその方の強みに気づくことができています。」

②⑧医療・介護専門職が地域住民や地域で暮らす認知症の人と出会うことで認知症ケアを通した地域づくりを考えるきっかけとなる

普段、施設の中だけでケアが完結しがちである事業所スタッフが、カフェで様々な人と出会うことにより、認知症ケアが地域とつながっていることを意識でき、地域の中での認知症ケアについて考えるきっかけを作る場となる。

例)「単に事業所の介護職員としての視点だけでなく、地域づくり（まちづくり）の観点を共生を理念とする NPO に働くものとして持つことができる。」
「様々な方に接することにより、地域で生活する方々の状況をより理解し、自身の活動に役立て、還元してほしい。」

②⑨医療・介護専門職と介護する家族・認知症の人が同じ立場で交流できる場となっている

認知症カフェと言う自由で開かれた空間の中で、援助する側とされる側という関係ではなく、対等な立場で専門職と家族・本人が交流し、時には仲間意識も生まれる場となっている。

例)「日頃話す機会や家族の訴えをゆっくり聞く機会が少ないことから、情報収集や交流の場にもなっている。」
「認知症サポーターの方や介護福祉の方々がスタッフや参加者としてのかかわり方なので、みんな同じ仲間同志という感覚で接してもらっている。」

支援する市民ボランティアへの効果 ③⑩③①

③⑩市民ボランティアが認知症の人とかかわることで理解を深める場となっている

市民ボランティアが認知症カフェのスタッフとして、認知症の人と実際に関わりながら、認知症の人のありのままを受け止めたり、話を否定しないなどの認知症の人への接し方を実践し、理解を深める場となっている。

例)「スタッフは全員ボランティアであるが、ありのままを受けとめる姿勢はあるように見受けられる。」
「スタッフ（市民ボランティア）は、開設当初は話を否定する様な態度を取る人もいたが、今では相手に合わせて対応している。」

③①市民ボランティアが効果を実感し、喜びややりがいを感じる場になっている

市民ボランティアがカフェのスタッフとして主体的に運営に参加し、認知症の人や地域住民がカフェを利用する姿を見てカフェの効果を実感し、人々の役に立てることの喜びややりがいを感じる場になっている。

例)「ボランティアのスタッフが認知症の人や地域の人への効果を実感することで、喜びややりがいにつながっている。」
「スタッフは利用者とのふれあいにより自己実現できているようで、活き活きとなり、次の活動に積極的に参加してきている。」

社会や地域への効果 ③②～③④

その他の項目への記述でみられたのは、認知症カフェがそこに関わる認知症の人や家族などだけでなく、コミュニティや社会全体に影響している内容のものであった。

③②地域包括支援センターや社会福祉協議会などの関係団体に活動が伝わることで、地域のネットワークづくりや連携強化につながる

カフェの運営にあたり様々な関係団体と関わったり、地道な認知症カフェの活動が関係団体に伝わったりすることによって、情報交換が促進されて地域のネットワークづくりや連携強化につながる。

例)「関係団体との連携が深く、広くなり、これまで以上に様々な情報が回ってくるようになった。」
「地域包括支援センターや学区社協などに私たちの活動が伝わることにより、地域でも同じようなことがおこなえるのではないかという模索が始まっているように思います。」

③③誰でも集える場となることでコミュニティの雰囲気をも明るくする

認知症カフェという誰でも集える場の存在により地域に人の流れが生まれることで、コミュニティの雰囲気をも明るくし活性化することにつながる。

例)「明るくなったし、人通りの少ない通りが人が行きかう様になり、嬉しいと言って下さる。夜、灯りがついていると温かい気持ちになる。みんなが集える場ができて嬉しい。活気が感じられてとても良い。どこからともなく集まる子供達が来てにぎやか等、みなさんから好評を得ている。」

③④マスコミに取り上げられることで社会全体の認知症への注目を集める

認知症カフェの中にはマスコミに取り上げられるものもあり、活動が広く社会に知られることにより、社会全体が認知症に注目するきっかけになっている。

例)「参加者、見学・取材の申込み数が増え、関心を持たれているのが分る。新聞や広報で取り上げられたことでますます注目が集まり、認知症理解の助け、家族支援に一役買っていると思われる。」

以上が調査結果より効果として挙げられたものを分類整理したものである。重要なことは、認知症カフェは認知症の人と家族、専門職、地域住民にとって効果的な場であることは間違いのないことである。特に、認知症の人と家族にとって、特に診断を受けた直後や初期の段階の行き場や相談の場所として機能するだけでなく、両者の関係性の広がりや家族としての機能や家族の生き方を支援するものとしての効果であることが重要である。専門職や地域住民が、認知症の人と家族と出会い交わる場が自然でかつ効果的に設定されていることで、ここでの出会いは一回性（その場その時の関係性という意味で一回性）でありながら、地域での暮らしの継続を可能とする人のつながりが生まれているようである。

3-2) 認知症ケアにおける、認知症カフェの意味

ア. 認知症の人と家族を「生活モデル」で支援する意味

認知症カフェは、デイサービスやデイケア（以下、両者を含めてデイケアとする）とどのように違うのだろうか、比較して考えてみたい。デイケアを利用することは、本人の日中の居場所をつくることと家族のレスパイトという主に2つの意味があると考えられる。デイケアは認知症の人本人が希望して行く場合もあるが、どちらかと言うと行きたいか否かではなく、介護認定のケアプランに則って「認知症の人」としてデイケアに行く。家族は一時介護から解放されるが、決められた時間に送迎が行われるシステムについては、助かる人もいればシステムにのることが苦痛な人もいる。家から通う場所としてのデイケアは、特別な場であるとする看板を掲げており、日常から日常でない場への移動が日常的に余儀なくされる。しかし本人が朝から夕方までの一日の大半を過ごす場所としては様々な工夫がなされており、送迎サービスを含めて介護する家族にとっては心身ともに休息を得ることができるサービスとして機能している。

このサービスにおいては、本人と家族の関係にはあまり変わらない。本人は「認知症の本人」として、デイケアに行き、そこで決められたプログラムに参加する。つまり医療や福祉の対象者・ケアを受ける人として存在する。

一方、認知症カフェは、本人と家族の関係に、変化を起こす。本人も家族も「行きたい時に行く」という自発的なものであり、カフェでは、家族とは違う第三者がいることで、交流が生まれる。本人と家族の閉じた関係性に違う流れが加わる。通う場としても地域の家の一部を改修したような場であり、町にとけ込み、特別な場としての構造もなければ、特別な看板もなく、愛称や呼称で親しまれている。そこでは認知症の人として扱われるのではなく、一人の人としてその場を過ごす。家や病院やデイケアや施設とは違う別の関係性が生まれ、別の役割（所属）が生まれる。カフェでは本人が家や病院・施設、デイケアでは見せないような姿や表情を見せるため、家族も驚く。つまり本人と家族は認知症カフェで再び出会う。そして専門職もそれまで知らなかった本人の一面を見るのである（以上の説明の図式化は図3を参照）。

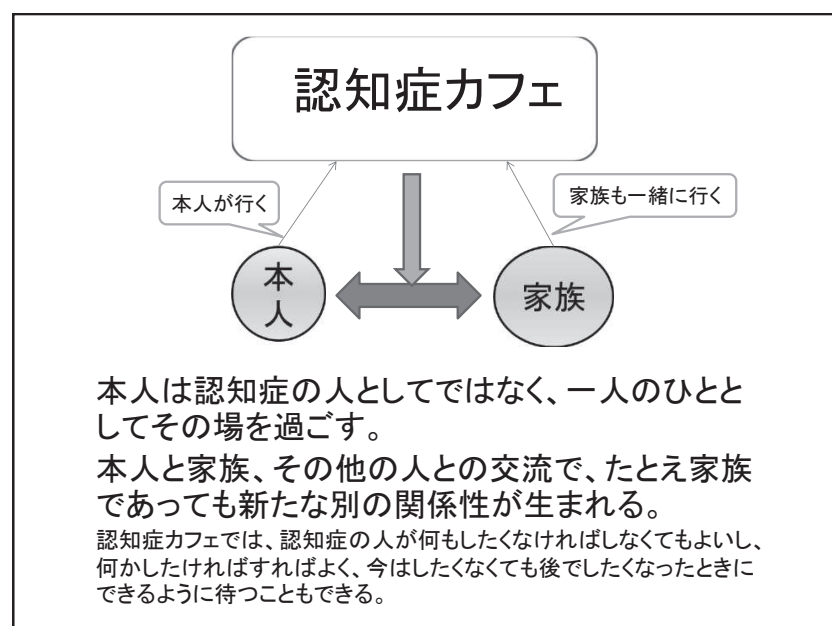
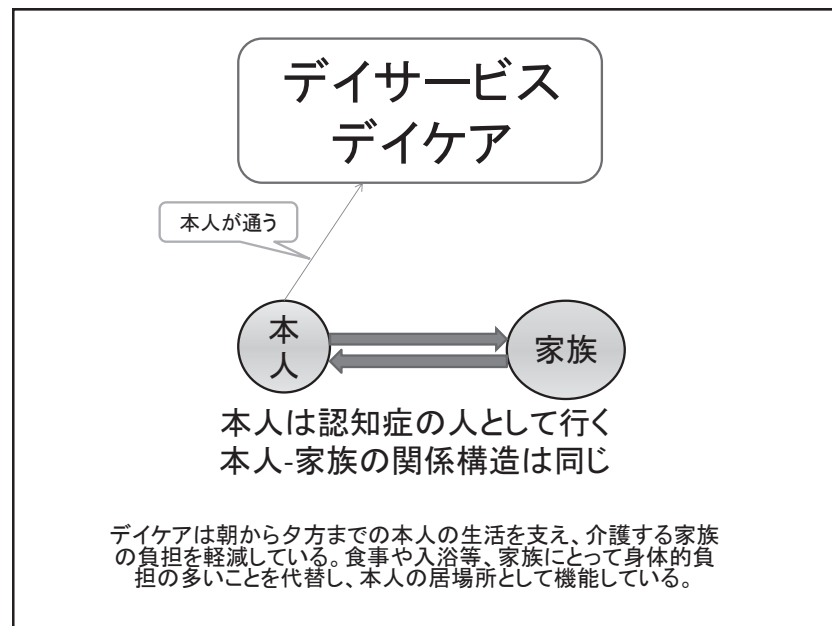
このように認知症カフェでは、診断前提のサービスや制度としての医療モデルでは引き出せない本人の持ち味（能力）を引き出せる。また、認知症によって生じた暮らしや生活の変化・混乱、漠然とした不安は、第三者への相談により交通整理され、具体的な対策に結びつきやすい。それは病院受診というほどの大げさなものではないが、暮らしの悩みやトラブルを、暮らしの場で解決していくという支援は、認知症の人と家族が滞りなく暮らしていく上で重要なことである。

医療・介護専門職者も、病院や施設・デイケアとは違い、専門職の顔として本人と出会わない。どちらにとっても、暮らしの延長線上、人として出会う場であり、生活モデルである。デイケアのような設定された場での出会いとは少し異なるものである。

以上をまとめると、デイケアと認知症カフェの違いは「本人が主体性を存分に発揮できるかどうか」「本人と家族の関係性を変えるものかどうか」の2点である。デイケアのプログラムを構成しているのは、デイケアスタッフである。一方、認知症カフェでは決まったプログラムへの参加が主体ではなく、どう過ごすかを決めるのは認知症の人であり、家族であり、市民でもある。この違いは、関係性の障害と言われる認知症のケアを行うにあたり、関係性を変えるものとなるのかどうかの違いを生み出す。本人と家族は認知症になったことで、それまでの関係性を維持することが困難になる場合があり、それまで紡いできた夫婦関係や親子関係などを保てないことは、時に苦しいものとなる。介護保険以降、

ここに医療や福祉の専門職が介入してきたが、その関わりの多くは診断と障害の程度に基づき、医療や福祉として今やらねばならないことを提供することが優先されてきた。結果、ケアするもの・されるものという構図は変化しないままであり、本人と家族の関係性を修復したり変えたりすることには及ばなかった。一方、認知症カフェというゆるやかなつながりは、本人と家族にとって、専門職や地域の第三者（理解ある人）は理解のある友達のような第三者として機能する。このような存在は、認知症の人と家族の関係、本人と周囲との関係に良い方向の変化を生み出している。

図3 デイケアと認知症カフェの違い



イ. 敷居の低い相談場所、医療・ケア・福祉の入口としての意味

すでに認知症サポーターなど、地域に認知症にやさしい人を増やす取り組みが行われている中で、認知症カフェという地域の資源を、今後認知症ケアの中でどのように生かしていくのか。サポーターが居るだけでは有効なサポートとして必ずしも機能しない。特に認知症の初期に起こる問題や社会福祉サービスから漏れ落ちる人々に対しては、彼らがそれを支える人と結びつく場が必要である。また、支援するボランティアは、認知症サポーター講座のような机上の学習だけではなく、認知症カフェで実際に本人や家族に出会い、話をしたり、同じ食べ物を食べることを通じて、認知症を生きることや介護について現実的に理解することができる。認知症の人が住みやすい街づくりには、現実的に支えるサポーターの存在が増えることと同時に、地域に認知症の人が安心して行ける場、気持ちを受け止める場のあることが必要である。そのことが、サポーターの存在を再度認識させることにもなる。

物忘れがありちょっと心配、認知症かもしれない、認知症と診断されて間もない・・・という時期の人にとって、病院を受診するというのは非常に重たい意味を持ち、なぜ病院を受診しなければならないのかわからないということがある。しかし認知症カフェのようなコミュニティベースの相談所やピアサポートのようなものがあれば、「病院に行くほどでもないけど、相談したいな」という程度でも、認知症に少し詳しい人に出会うことができる。それは決して病気の「宣告」にはならない。ケアとの出会いも早めることができる。認知症という「旅路」の最初の案内所である。たとえ旅路の途中であっても、いつでも誰でも気軽に立ち寄ることができる、休憩スポットでもある。そこでは、自分自身を取り戻す時間が保証され、安心して他者とのやりとりができることで、自分らしさを実感できる場となる。

また、何かに挑戦してみるという気持ちを持つ認知症の人にとっては「これだったらできる」ということを気軽に試してみることができる場が、当人にとってなじみある暮らしの風景と言える範疇の中にある、ということに意味がある。なじみある暮らしの風景とは、単に当人が住む地域（地元）を意味するのではなく、人が普通に暮らしている地域であり、当人にとってなじみの人や安心できる人がいる場所があることを意味する。

以上のように、暮らしの場を変えないケアのひとつの形として認知症カフェはゆるやかだが大きな意味を持つ。出会えなかった人が出会う、出会わなかった人と出会えることは、認知症の人とその家族、市民、医療福祉専門職が早くに効果的な出会いをし、理解者を増やすことにつながる意味で重要である。このような出会い方や関係性のつながりは、認知症ケアにおけるひとつの形として大変重要である。以上のように、敷居の低い相談場所、医療やケアへの第一歩に至る踏み台としての機能、地域の中にそれまで認知症につながりのなかった人を増やす・巻き込むことに意味がある。

ウ. 特別な場ではなく日常の中で実現する意味

地域住民の誰もが自由に出入り可能な場所で行うことが期待される認知症カフェは、買い物ついでや散歩の休憩に立ち寄ることができるような場所で開かれている場合がほとんどであり、特別な環境や機材を用いることなく、地域にある資源（レストランや民家）を利用して、日常の中で実現している。つまり人々の暮らしの中に溶け込み、地域のインフォーマルな資源を有効に利用することで、認知症の人と家族の生活の質の維持を支援しようとするものである。しかしこのような気軽に行ける場であることは、同時に認知症の人と家族にとって「誰にも言えない」悩みを打ち明けたり、深刻な相談事のできる場とはならない可能性もある。近隣や地域の住民に認知症であることを知ってほしくない人にとってはもちろん、そのように思っている人でなくても事情を知られることは勇気のいることで、

偏見や差別を受けるのではないか、という不安を煽るものである。また、認知症であることや介護をすることによる辛さは当事者同士でこそ分かるものであり、そのような思いや悩みを、喫茶店でおしゃべりするかのようには話すことはできない時期もあるだろう。認知症カフェという場があることで、巻き込むことのできる一般の地域住民は格段に多くなるに違いないが、真の理解者を増やすことが大事であり、認知症の人と家族の人が心ない言動に傷ついたり尊厳を損なわれることのないような場となることが望まれる。認知症カフェでは話せないこともある、ということを念頭に置きつつ、支援する側が慎重に関わっていくことも必要である。そして必要と判断されれば迅速に医療や介護・福祉、行政につないでいくことが求められる。従って認知症カフェでは、そこで過ごす時間の居心地の良さを保障されることはまず第一に大切なことである。しかし、本人や家族がくつろぐことができる場をつくるということは、一時的なホスピタリティを提供することに留まらず、深刻な日常を生きる本人や家族が抱える不安や辛さを受け止め、明日を生きるために現実的な支援をつないでいく場であって初めて、その存在の意義が生きてと言える。病気の進行とともに、認知症カフェでは対応できない場合や別のケアの介入が必要になることが予想できる。そのような限界と他のケアへの継続により、認知症の人と家族が切れ目のないケアを受けることが、長期的にみた認知症カフェの効果といえるものである。

3-3) 認知症カフェの今後の課題と今後

今後認知症カフェを継続し、より良い内容で各地に広げていくためにはどのような課題があるかをまとめた結果、以下の3点が浮かび上がってきた。

課題1 運営の手引きについて

日本では現在それぞれの認知症カフェが独自の方法で実践しているが、調査の中では、運営上の問題や困難を抱えていることも明らかになった。また、どのようにしたら良いかわからないまま模索しながら運営をしているところもあった。一方、イギリスのメモリーカフェやオランダのアルツハイマーカフェでは、これらのカフェを始めたい人向けのガイドラインや手引書を各国のアルツハイマー協会が作成している。また、実際に始めてからも運営や評価のフィードバックが受けられる仕組みがある。我が国においても、このような手引きやガイドライン、また運営におけるサポートシステムがあることが、質を保ちつつ各地に広げていく方法として有効である。例えば、行政の窓口で得られる情報以外のあらゆる情報をどのように収集し提供するのか、民家やレストラン等の場所の確保、運営資金の相談、行政や地元団体との連携など、実際の運営において先駆的な事例やモデルを閲覧できるシステムとしても活用できる。また、これに伴って、今後は認知症カフェ自体の定義づけや地域での呼び方についても検討されていく必要がある。

課題2 人材確保と人材育成について

今回調査した中で課題として挙がっていたのが人材の確保と育成である。認知症カフェを運営し支援者として支えるスタッフはボランティアである。有償の場合は資金が必要であり、無償の場合は開催の頻度が高いほど人の確保が難しい現状がある。開催頻度を増やしたいがスタッフが足りない、利用が増えるのは良いがスタッフに負担がかかってきている、などの課題が挙がっていた。また認知症カフェのボランティアは、認知症についての知識や関わりの注意について一定の研修が必要である

が、ボランティア育成については各カフェに任されているのが現状である。しかし今後は育成についても一定の基準や課程を決めて各地・各カフェでの格差ができるだけ生じないような対応も必要である。また、専門職や行政の職員が地域の住民として参加し支える仕組みを作ることで、人材の確保と育成を促進する人として機能することも必要である。

課題3 運営資金について

すでに実践している認知症カフェでは、今後の継続のための資金確保に困っている場合がほとんどである。特に家賃の支払い、場所代・運営資金の賄いなど、すでにあるカフェの継続を支えるためにも、継続資金を保障する行政の支援が一刻も早く打ち出されていくことが第一に重要である。また、これから始めたい団体や個人についても、開設運営資金を助成する仕組みが早急に望まれている。「日常の中で運営する」のが一つの理想と言えるが、認知症の人と家族がつどい、お互いの状況が似ている人と出会ったり、認知症の人と家族が個別のニーズをスタッフと共に話すには、居心地の良さと共に一定の大きさの空間が必要である。その場所の確保と、そのための資金は重要である。たとえ場所が確保できた場合でも、地域の中でその場所に認知症カフェを根付かせていくためには、周囲の住民との調整なども必要である。そういった長期的視点でみた場所の確保に対しての、行政からの支援が望まれる。

認知症の人の入院や入所を防ぎ、地域の中での暮らしを維持するという中長期的な経済効果も考えると、介護保険制度や障害者自立支援のメニューとして確固たる運営基盤を与えることも検討が必要であろう。先駆的に「物忘れカフェ」を実施しているところでは、すでにそのような枠で行っているところもある。認知症カフェは、これまで介護保険サービスにはなかった「認知症の人と家族が一緒に利用できる場」であるからこそ、このような場が認知症ケアおよび社会において制度的に位置づけられることが望まれている。

V. 海外の認知症カフェに関する情報収集内容

1. イギリス (2013.2.11 井上恒男氏にヒアリング)

イギリスではメモリーカフェあるいはアルツハイマーカフェと呼ばれていて、アルツハイマー協会の支部のようなところが行っている。2009年2月～の National Dementia Strategy の一環で始まった。いわゆるコンタクトポイントとしての一次予防の場所として、どこかにつなげるための入口となることを意識している。物忘れについて気がかりなことがあれば立ち寄れる場所で、設置も銀行やスーパーの並びにあるお店でやっているの、買い物ついで等に立ち寄れる場所である。

ホームページでは、「A Guide to Setting up a memory cafe」という手引きをダウンロードすることができ、開設したい人が参考にすることができる。

最近では日本の認知症サポーターを参考にしたと言われている、Dementia friends という制度ができた。

2. オランダ (2013.1.17 堀田聡子氏にヒアリング)

ヒアリングの内容は以下4点について

- ・オランダの保健医療福祉のシステムについて
- ・国家および自治体での認知症対策について
- ・認知症の人と家族の人がどのように暮らしているのか
- ・認知症カフェについて
 - ①アルツハイマーカフェ
 - ② Odensehuise (オデンセハウス)
 - ③ミーティングセンター

①アルツハイマーカフェ

- ・認知症の人と家族、友達、地域住民、専門職など誰でも参加でき、和やかに集う。
- ・Alzheimer Nederland によるガイドライン、ネットワーク、コーディネーター教育
- ・財源は自治体や Alzheimer Nederland を通じた助成金など様々で、自己負担なし。・月1回2時間程度、どこのカフェも同じタイムスケジュールで行う。運営は手引きに従って実施するため、どこでやってもプログラムは決まっている。これは意味のあるタイムスケジュールで、30分毎に区切られている。決まっていることで利用者は安心する。

〔タイムスケジュール例〕

30分 コーヒータイム

30分 テーマを決めた、専門職によるレクチャー

30分 休憩・おしゃべり (ライブミュージック等)

30分 参加者と講師による質疑応答、ディスカッション

30分 講師も交え、さらに飲み物とともに歓談

- ・専門職は一住民としてボランティアで来て、各テーブルのファシリテーターとなっている。

- ・ 1 年分の日時・レクチャーのテーマがリーフレットになって関係機関で配布されたり、自治体広報に掲載されている。
- ・ 参加者の満足度は高く、固定客あり。全土 200 か所存在する。

② Odensehuse (オデンセハウス)

- ・ 毎日開いていて、いつでもだれでも自由に出入りできる、近所の人たちのコミュニティ
- ・ 家の延長、リビングハウス
- ・ 患者や利用者ではなく、会って、お互いが助け合いながら生活することが目的で、来て何をしても良いし、何もしなくてもよい。
- ・ 自立した生活ができるけれども、ちょっとしたところをサポートして欲しい人たちに早期に居場所を提供する。
- ・ 行政関与なし、セルフオーガニゼーション

③ ミーティングセンター

- ・ 通所介護の一形態で、診断とケアの認定を受けている人を対象とし、必ずインフォーマル介護者と利用する。(介護者同伴ではない場合はデイサービスに行く)
- ・ AWBZ (強制加入の医療保険のひとつで、日本でいう介護保険のようなもの) のもとで受けられる。
- ・ プログラム 3 本柱は、認知症者へのケア、介護者へのケア、両者へのケアである。認知症者のケアではグループディスカッション、買い物・食事作り・片付け、心理療法などがある。介護者同士でのミーティングを行い、専門家によるレクチャーもある。両者に対するケアでは全体ミーティングを行う。
- ・ スタッフはプログラムコーディネーター (教育プログラムあり)、介護士、一般ボランティアで、介護事業者や福祉団体等の各機関との協定に基づく協働体制である。

Ⅵ 資料集

＜資料１ 認知症カフェで実施している内容一覧＞

施設 内容	茶菓の提供	食事の提供	料理教室などと一緒に料理を作る	認知症の本人による給仕	専門職による介護相談	専門職による講話や勉強会	音楽の生演奏	カラオケ・歌	囲碁・将棋	クイズ・パズル・工作	認知症の本人による運動・アクティビティ	パソコン教室	健康チェックや医師による診察	発表会	駄菓子屋など子供との交流	懐かしい道具・写真の展示・写真	日記や脳トレ・ゲーム	アロマセラピー	遠方への外出	送迎	入浴	映画上映会	作品の販売（食品含む）	認知症の本人による講話
a-1	○	○	○	○																				
a-2	○	○	○																					
a-3	○	○	○					●												○				
a-4	○																							
a-5	○			○	○	○	○																	
a-6	○			○																				
a-7	○	○	○																					
a-8	○	○	○																					
b-1	○				○	○	○																	
b-2	○				○	○	○		○	○	○													
b-3	○	○	○		○	○	○												○					
b-4	○	○	○	○															●					
b-5	○		○	○				○	○				○											
b-6	○						○																	○
c-1	○				○					○	○									○				
c-2	○					○																		
c-3	○	○																						
d-1	○	○	○	○								○		●										
d-2	○	○	○	○	○	○				○														
d-3	○		○	○		○				○														
d-4	○		○	○	○		○			○											○	○		
d-5	○	○					○																○	
d-6	○																							
d-7	○				○								○							○				
e-1	○	○	○		○		○	○																
e-2	○																							
e-3	○	○	○			○					○									●				
e-4	○				○					○	○		○										○	
合計	28	13	7	2	10	7	7	3	2	5	6	1	3	1	1	1	3	1	3	3	1	1	2	1

○ 普段の活動の中で行われていると思われるもの
● 年に一回など、イベント的に行われているもの

<資料2 認知症カフェ調査一覧>

	効果	効果	効果
	本人や家族への効果	地域住民への効果	スタッフへの効果
a. 認知症の人と家族が集う場の発展型（8カ所）			
a-1	本人は回を重ねる度に“責任感”を持たれているように思えます。又、カフェを開いた日は“生き生き”と明るい笑顔が多く見られる。家族と一緒に居る場所の為に、日頃、家族から落ち着きがないという事を聞くが、(サービス利用時の帰宅願望等)カフェに居る間、当人の方達は落ちつかれている様子が見られる。又、家族の方達は、同じ立場の人達とゆっくりコーヒー等飲みながら話しかれていて、次回を楽しみにしてくれている様子。同じ仲間に見える楽しさが生まれているのかと思えます。	ある地域の方が云われた「普通の人だよ。たいしたもんだ」という言葉で表現されたように、認知症の人に対する見方があたたいものに変わってきていると思います。	「認知症の人でも、ちょっとしたアドバイスで出来ることがある」という認識が再確認されたと思います。
a-2	当初は若年の本人と家族のみに限っていたが、初期診断の普及により早い段階での診断を受けた認知症高齢者と家族で現在の介護保険サービスになじめない方々、認知症への病識も理解が、不十分な方々も参加してもらうようになっている。また、その輪をより広げた「本人と家族のつどい」も不定期に開催している。こうしたつどいへの参加により、本人は社会的つながりや役割を得て笑顔が出、「この会には来たい」ということが多い。家族は本人のできること、笑顔に接すること、家族同士のピアカウンセリングにより認知症の理解や、関わり方、心の持ち方等を学習し、その結果本人の症状も落ち着くといった状態に結びついている。	日常的には、地域で営業している喫茶店を毎月第4日曜日については「***」で借用開店運営ことから、地域の住民に対する認知症への理解に役立っている。ちなみに毎月第1土曜日は聴覚障害の人たちの自主運営となっており、いわゆる「見えにくい障害」がある人達の理解を深める場となっている。	ボランティアで支援者として関わっている専門職や「家族の会」のケアサポーターにとっても、つどいの場は本人や家族の思いの理解と心の揺れなどの良い体験となっている。
a-3	1.「家族の会」で暗い顔していた人が明るくなった。 1. 笑顔や笑い声が沢山出るようになった。 1. 各自問題点や悩み事が解消された。 1. 会員の交流が活発になり、より良い方向になった。 1. 会についての意見も出て、会の運営も良い方向になった。	現状では会員のみで地域住民を対象としていない。	会の問題点の提案、意見をまとめ、会の良い運営に役立つ。
a-4	本人への効果：民家であることによって落ち着く。リラックスできる。トイレの回数が多い人が1回だけなど。当初はホットプレートカフェなどといい、本人らが作って食べることも考えたがそれはしていない。 家族への効果：本人と離れて家族・市民と語りあえる。「家族の会」のつどいと同じ。	実際に認知症の人たちと出合い、認知症を知ること。徘徊などの対応がわかることなど。怖れるような病気でないこと、特別な病気でないことを知る。	スタッフとしての配置ではないので、スタッフという表現が合わない。支援者、当事者以外の参加者という感じ。自分の近い将来のこととして関わるようになってもらっている。認知症のことが「自分のこととして胸に落ちてくる」という表現をされ、どう看取られるのがよいかなどを互いが真剣に考えるきっかけになっている。
a-5	・同じ環境や境遇の人達が集うことによる、1人ではない安心感と相互のアドバイスで仲間づくりにつながっている。 ・日々の介護におわれ、介護保険の各種サービス内容や地域の社会資源、行政で行なっている情報を知る機会がなかったと言われる家族もいる。	周知方法の問題もあり、参加がない。	当法人の認知症対応型通所介護の利用者の方々へも認知症カフェの周知をしており、参加される方もいる。当事業所のセンター長が参加し、日頃話す機会や家族の訴えをゆっくり聞く機会が少ないことから、情報収集や交流の場にもなっている。
a-6	カフェ当番の時は、おそろいのエプロン、名札をつけていただき、役割があり、必要とされている事を実感していただきたい。御本人にお礼を言うと、「私は何も出来なくて…」とおっしゃる。しかし、独居の方や、軽い認知症の方が、お茶している横にその方が座って下さると、話をしたり、笑顔を引き出して、あたたかい気持ちの交流になっているように思える。 御家族へも(いつも失敗談をお聞きしているが)、カフェにては参加して下さりたすかっている事、感謝している事を伝えるようにしている。御本人へのプラスの評価になってほしいと思いがら……	特養は、市内循環バスのバス停の前に位置している。カフェが営業していれば、バスを待つ時間にカフェに立ち寄ったり、施設を身近に感じ、理解も深まると思う。本当は毎日営業していれば、利用ももっと増えると思うが、無理のない範囲での関わりという事で、地域への効果については限界も感じている。	老人ホーム入所者、デイサービスの利用者、おさそいした地域の軽度認知症の方、散歩途中に立ち寄られた方、いろいろなお客様に対応する事で、又、当事者の方と一緒にくんでカフェの仕事をする事で、認知症への理解の深まり、対応への工夫が生まれていると思う。
a-7	ひとりでは「できない」ために暮らしにくくなって閉じこもり、生活に不安を抱くことの方が多かったのに、デイを利用している人と一緒にパンやケーキを焼いて食べたり、話をする中で表情に明るさを取り戻した方や、できなかったことが実はできるのだと発見することもあった。ただ、中核症状の進行により、時間とともにできなくなることはあるが、それまでを知っているサポーターが適切にサポートすることで、参加を継続できている。	認知症の症状を知ってもらう。理解してもらう。	軽度の方から関係を作れるので、「その人」を知ることがかりを得やすい。サポーターが「その人」の気持ちを知った上で取り組める。
a-8	一時でも本人から離れることで、家族がホッとできる時間を持ってもらうこと、本人がいては言えない家族特有の悩みを話し合える場となること。 本人も家族以外の人と接することで、緊張感が生まれ、いつまでも社会(地域)の一員としていられること。	認知症の方と一緒に過ごして頂くことが、「当たり前」で特別に何か知識や技術が必要ということではなく、さりげない配慮が自然にできるようになったこと。	スタッフもボランティアなので上記(地域住民への効果)と同様です。

<資料2 認知症カフェ調査一覧>

課題	運営母体	ネットワーク	具体的内容	場所	案内	支援	本人制限	住民制限	負担	運営費	財源
課題や問題点	1当事者 2市町村 3都道府県 4医師 5医療機関 6法人 7その他	地域の連携等 1はい 2いいえ		1民家 2店舗 3病院施設 4行政社協 5その他	1主治医 2家族会 3民生委員 4医療職等 5行政窓口 6広報 7その他	1市民ボラ. 2 民生委員. 3家 族会. 4認知症 7-5医師. 6医 療職. 7介護 職. 8福祉職. 9 行政社協. 10 老福祉員. 11 その他	1制限なし 2重症度制 限 A-MCI B-軽度認 知 C-中度認 知 D-重度 E-その他 3年齢 4その他	1制限なし 2一定条件 A民生 B認知症 Cその他	1会費 2一回毎 3実費 4その他	1. 10万未満 2. 10-50万 3. 50-100万 4. 100-200 万 5. 200万-	1助成 2自己資金 3本人負担 4その他
当人・ボランティアへのガソリン代の支払、材料の仕入代、光熱費支払、備品の購入等、収支バランスがアンバランスの中での運営はやる気を好意のみでは長く続いていかないのではないかと、「商品」とできる専門性も身に付けていて必要もあるように思います。もし、全国に認知症の人達で運営するカフェ等が何店か有れば、共同で専門家から学べる機会でもあれば良い(スタッフ、当人の研修)もの珍しいだけでは継続は難しい。行政からの多方面からの支援が必要。	1	1	特に包括支援センターは認知症の人や家族にカフェを案内している。自然発生的に地域の人達が関心を持ち、口コミをしてきている。	5	2. 6. 7	1. 3. 4. 11	1	2-a. b	4 飲食実費のみ		2. 3
・継続していくための運営費など財政的支援 ・“居場所”として自由に使える、調理などが整っている会場(病院や行政的な施設内ではなく) ・関係作りや運営の専任スタッフの配置	1	1	・県、市、行政 ・福祉、まちづくりNPO ・認知症疾患医療センター相談員、専門職のボランティア参加	2	2	3. 6. 7. 8. 9	2-C	2-C	2	2	1. 3
最初は2ヶ所では始めました。しかし「子供劇場」では、駐車場が無く集まりが少なく現在「アミー」のみです。もっと多くの介護者が参加出来る様、PR、適切な施設、場所、スタッフ、費用等市の協力が必要(3ヶ所位が適切)	1	2		2	2	3	4	2	3	6 なし	2 個人実費のみ
・若年性認知症の人が集まれるような会も開催したい。介護保険内では高齢者のみに焦点が向き、質が追いついていない。やるべきことをやっていないと思う。自主グループを育て、当事者の役割を尊重できるものを作っていきたい。 ・自分達の手でやっていきたい。出来ないときは相互に助け合う。介護タクシーの免許を取ったご家族もいらっしゃる。このような自然発生的な活動を続けたい。増やしたい。 ・日曜日に専門職(医師、看護師など)を集めた会を区、都の協力のもとではじめようとしている。 ・土曜日版カフェを週2回に増やしたい。 ※ 欲しい支援はないと言われたので、今後の課題と目標として語っていただきました。 この家を利用したいという主催者が増えることを願っている。営利目的でなく主催者が集まり、時々でも本音が語られるような宴会をすることが条件である。	7		あえてあげるなら、地域包括支援センターだが個人的つながりが主である。他には、区(地域ケア推進課)、保健予防課(保健所)とは連絡を取り合っている程度。社協の月2回、1回1500円のふれあいサロン助成はもらっている。電気代程度にはなる。	1	2. 3. 4. 5	1. 3. 4. 9	1. 4	1	2	1	2
・当事者、家族、専門職のみではなく地域住民の参加促進 ・メンバーが固定しつつあるので他の方への周知や参加促進の方法	5. 6 NPO	1	市直営の地域包括センターの職員が毎回参加。市の職員にミニ講話の講師を依頼することもある。	3	2. 5. 7	6. 7. 9. 11	1	1	4 無料	1	2. 4 国の委託事業費や業者の協力等
現在は、特養にもともとあったカフェをお手伝いする形ですが、いずれは自分達の居場所カフェ(独居高齢者や認知症の方、出来れば地域の子供も含めた交流の場、働くお母さんも応援できるような場、栄養バランスのとれたランチをお出しできる場)を夢みています。その為には、ランチの売り上げで、関わったスタッフの時給をお支払いしてペイできるような事業でないと続かない。せめて立ち上げ資金、場所の確保があれば…との思いです。	6 社会福祉	1	介護者のつどいの活動において、年間計画、会報発行の際は市、包括、居宅、公民館、図書館等への配布、市の掲示板への毎月の掲示を行っている。社協主催の見守り声かけ地区委員会に出向いての広報活動。	3	2. 7	1. 3. . 4	1	1	3	6 施設が運営。私たちの負担はなし。	
認知症の人が「何かをする」ためには、「症状の進行」という独自性を持っている。それを補うのは人。協力してくれる人が欲しい。又、家族は仕事のために常に本人に付き添えるとは限らない。それを補う人、人件費が欲しい。	6 NPO	2	個人的に協力してくれる人、賛同者を呼びかけて集めている。	3	7	1	1	1	2	2	
・当事者の掘り起こし ・ボランティアの不足 ・固定した拠点	1	1	社会福祉協議会が事務局としてサポート	4	2	1. 3. 4. 9	3	1	2 実費		3

<資料2 認知症カフェ調査一覧>

	効果	効果	効果
b. 認知症または高齢者の専門施設発展型（6か所）			
b-1	・家族間で認知症について話しやすくなったと聞く。 ・認知症の診断を受けて、暗くなっていたが、少し先が明るくなった様に思うと言われた。 ・未告知の方は、スタッフが間に入り、家からの送迎を行うことにより、皆さんの輪の中にスムーズに入ることができ「また来たい」と	当事者の方のお話を直接聞くところまでは今はまだ至っていないが、認知症に対して正面から向き合う姿勢はみられた。	うちの場合、今のところ居宅のケアマネ、包括のスタッフ中心で行っているが、初期の方、若年性の方と接することにより、それぞれの今持っているその方の強みに気づくことができています。
b-2	まず本人への効果として、家に閉じこもる状態や生活が縮小しかけた状態を解消する効果があります。それは単にカフェという場所に出てくるとい物理的なことも関係しますし、そこで会話や趣味的な活動を通じて自分らしさを取り戻すことも含めて、認知症が始まったことや、家族の間で生まれてきた葛藤を緩和して、生活範囲の縮小を解消する効果につながっているように感じます。今後、データの検証を踏まえないと明らかでない面もありますが、BPSDの発現や精神科病院への入院などを防ぐものではないかと考えます。 次に家族への効果として、本人の生活の縮小を残念に思う気持ちが緩和されることが、もの忘れが始まり同じ話の繰り返しが続く本人と接する時間が多くなることから来る緊張感の緩和、スタッフや他の家族と話をすることによる介護負担感の軽減や介護方法の学びなどが得られているのではないかと思います。更に、それら本人および家族への効果の総合的な効果として、家族としての機能（家族同士で会話する・相談する・生活を継続するなど）が保たれるのではないかと考えています。	まだ、当カフェではこの点について十分なアプローチが行えていませんが、地域包括支援センターや学区社協などに私たちの活動が伝わることにより、地域でも同じようなことが行えるのではないかとという模索が始まっているように思います。また、ごく近所の人から始まって、認知症を身近に考える雰囲気が生まれつつあるようにも思います。	認知症という病気は本や講義で学習しただけではわかりにくい面があり、実地に経験することで理解が深まっていっていると感じます。また、家族や身近な人での認知症の経験がある場合も、人による違いや重症度・経過による違い等を経験することによっても認知症に関する理解が深まっていると思います。当カフェではボランティアスタッフが中心のため、スタッフを介して市民に認知症理解が浸透することも期待しています。
b-3	・カフェに来られた方からの相談で、地域包括支援センターにつないだ方がいる。 ・認知症の入口と思われる方の参加のある時もある。	ボランティアの募集をしたところ、10名以上の申込みがあり、カフェ開設に対する関心は高い。	認知症に対する意識の向上はあるが、実施するスタッフはとても多忙になっている。
b-4	認知症の本人はとても楽しく「話を聞いてもらえる人がいる」という事で明るく笑顔で話されている。 送迎（歩いて来られない人は）をしているので、行く前にTELをして茶の間があることを教えて迎えに行く。又、一人暮らしの方が多いので、家族の方へはなかなか伝わっているかどうかかわらないので、民生委員の方にはお知らせして、介護保険を使っている方はケアマネに連絡をとっている。	元気な方々はあまり参加する意識が薄い感じを受ける。	認知症サポーターの方や介護福祉の方々スタッフが参加者としてのかかわり方なので、みんな同じ仲間同志という感覚で接してもらっている。
b-5	本人一利用者がまだ少ないのでわかりませんが、同じ立場にある人のせいか、普段口数の少ない人もカフェではにこやかに話されます。 本人のできることを中心にしているため、教える立場になっていたかと、とても誇らしげにされ、楽しそうに過ごされています。 こういう場面をつくることで、認知症の経過がおだやかに経過することを期待しています。 家族一家族同士のつながり、家族の不安解消、発散の場になっている。本人のよい状態をみることで、家族もおだやかになれる。		スタッフも関わり方については模索中。本人・家族への支援について勉強させてもらっている。
b-6	準備会を含め、回数を重ねるごとに、1)本人が元気になっていく、2)家族が元気になっていく、3)本人と家族との関係がよくなっていく、4)当事者同士や家族同士の関係が深まっていく、5)その関係はカフェの場を超えて勝手に拡大していく（電話で連絡を取り合う、送迎し合う、待ち合わせて一緒に食事をする、など）	自分たちが抱いていた認知症に対するイメージと、カフェに参加している認知症の人のイメージの「乖離」が強烈な体験となり、「目からウロコが落ちる」場になるようです。終了後には自分自身や御家族に関する相談もあって、「認知症の疾病観を変える」可能性を感じさせてくれます。	ケアスタッフは、中等度・重度の認知症の人との出会いが大半であり、そして「サービス提供者と利用者」という出会い方になります。初期の認知症や若年性認知症の人と出会ったことのないスタッフも多く、また「対等な生活者同士としての出会い方（ハンディキャップを持った生活者への配慮を前提ですが・・・）」は、自分自身の認知症疾病観を変える契機となると同時に、医療やケアの在り方を批判的に検証する機会にもなるようです。
c. 自治体のモデル事業型（3か所）			
c-1	・表情の変化：生き生きとした表情が引き出されている。 ・閉じこもりの防止：独居の人もあり、他者とつどい、言葉を交わす機会となっている。 ・仲間作り、仲間意識の芽生え：本人どうし、本人と他の対象者の家族、家族どうしの横の繋がりが強化される。欠席した対象者を気遣う言葉が聞かれている。 ・継続して来所できている。 ・遠く離れた家族も安心できるとの声もある。	・オレンジカフェ(医療型)：このような場の存在が地域住民に安心をもたらす。 ・オレンジスペース(サロン型)：口コミで広がり、地域に浸透しつつある。別の目的で施設を訪れた人が覗いて見て認知されることもあった。	・認知症の理解を深めるため、自己研鑽を積むようになった。 ・関係団体との連携が深く、広くなり、これまで以上に様々な情報が回ってくるようになった。
c-2	あせりや困惑が話す事、行政につなぐ事で安心感が生まれる。	講習会を地域住民向けにしている事で少しずつ理解している。	現実には色々な認知症の方々や接している、一番理解している。

<資料2 認知症カフェ調査一覧>

課題	運営母体	ネットワーク	具体的内容	場所	案内	支援	本人制限	住民制限	負担	運営費	財源
・外部からの利用者からは、コーヒー代などいただけるが、スタッフ等の分は、法人が負担しているため、少額の支援はほしい。 ・認知症の人と家族だけのカフェ(クローズ型)であれば、「若年性型デイサービス」になる様な気がする。いかに普通のデイとの差を出すか。	6 社会福祉	1	地域包括支援センター、自治会、学区社協、民生委員、老人福祉員、絆サロン(地域サロン)。今後は地域医師会とも連携をはかりたい。	2	1.4	5.8	2-C 4	2-a.c	2	2	2.3 社会福祉法人の持ち出し
・認知症カフェにはコミュニティカフェや街の居場所的な、介護に適した設計が行われている従来の介護施設や病院とは異なる空間が必要と考えますが、そのような場所が今のところ十分にはないと思います。 ・ボランティアスタッフも継続してかかわるには自分の生活に不安がないような体制すなわち、ある程度、有償での活動が望ましいように考えますが、そのためには資金が必要です(視覚障害者ガイドヘルパーなど参照)。 ・中心的に運営するスタッフの育成(給与なども含め)も課題です。	7 有志	1	・地域の居宅のケアマネがボランティアとして参加 ・地域の地域包括支援センターに活動を報告 ・地域の社会福祉協議会から見学あり ・地域地縁組織(学区社協)からボランティア参加あり	5 個人運営の街の居場所	1	1.4.5.6.7.8.9	2-A.B.C.E、3、4	2-C	4	5	1
・スタッフだけで実施するには、参加者数が増えてきている事で大変になってきている。 ・ボランティアを募集をしたところなので、ボランティアを含めたカフェ運営体制作りが課題。	6 社会福祉	1	・カフェ開催時に地域包括支援センターの認知症地域支援推進員が訪問するなど、連絡・連携に努めている。 ・月1回、自治体、地域包括、地域の医師と意見交換、反省会を行っている。	5	6.7 チラシ	1.4.6.7.8.9	1	1	3	4	1.2
認知症になっている事事態をかくす家族が多いので、介護者が一人で介護する大変さを少しでも手助け出来るように何でも話せる雰囲気作りや個別に相談出来る場所作りを作りたいと思う。	7	1	社会福祉協議会や地域包括の方で話していただく機会はあるのですが、なかなか外へ出すと恥ずかしいと家族の方の思いと、軽度の方は介護保険を使ってデイサービスに行くというケースが多いので来られても数ヶ月すると施設へというケースが多い。	5	7	1.2.4.7	1	1	3	1	3
本市で行なっているカフェの実施場所は、市の中心地から少し外れたところにあり、車のない世帯にとっては来づらい条件になっている。送迎が必要になってくる。現在は府の補助金で実施しているが、継続のためには財政的な支援を希望します。	5.6 社会福祉	1	市、包括、認知症疾患医療センター、ボランティアグループ「***」	3	4.5.6	6.7	2-D		2	5	1
現在は試行段階(勝手に始めた)のため、補助金を含めた経済的支援が何もありません。これまで「***」と「***」という、二つのコミュニティ・カフェ・レストランをお借りしましたが、会場費と人件費は「無料」にしてもらいました。ミニコンサートの演奏家費用はポケットマネーになります。まずは、「運転資金」の確保が重要で、そのために宇治市との相談・検討・構想を練る作業を継続しています。	1.2.4.7	1	正式に認可されたカフェではありませんから、逆に言うと「地域とのネットワーク」しかありません。2009年にできた「***認知症ケアネットワーク」を基盤にして、試行的にカフェを始めました。	2	1.2.4	3.5.6.7.8.9.11	2-A.b.C	2-C	3-500円	2	2
・人員不足:ほとんどのスタッフが他業務と兼務している。 ・入り口問題:対象者や家族、関係機関と信頼関係を構築し、定着を促す。人の気持ちに関係している。 ・事例検討不足:ノウハウを蓄積していく。 ・地域連携の更なる強化 ・啓蒙方法 ・学習会の実施:スタッフ向け、家族・市民向けに知識、理解を深める場、向き合う場が必要である。自分のこと(誰もがなる可能性がある)と認識)として知識を得ることで今後の入り口問題の解決に繋げたい。 ・オレンジスペース(サロン型)を将来的に中学校区毎に設置していくのが目標である。行く行くは現運営スタッフの手を離れて、自動的に育っていくは、各校区での設置も可能と思われる。	2	1	***市高齢介護課高齢福祉係を訪れて随時報告、運営の相談をしている。その他に**医師会、**地域包括ケア推進機構、***、医療懇話会、地域の家族会、地元自治会、老人会、民生委員と連携している。カフェ事業の報告、連絡などを行っている。	3.4	1.5.6	1.4.5.6.7	2-b、e 3.4	2-c	3	5	1
重度になれば、地域の在宅介護支援センターと家族と三者で話し合いをする。	7 有志	1	建物は市の施設ですが、運営は地域住民の有志です。(民生委員、日赤奉仕団、PTA、青少年団体等)	5	3.5.7	1.2	2-C 3	1	3	5	1.3

<資料2 認知症カフェ調査一覧>

	効果	効果	効果
c-3		開園してからまだ一年もたたないが、だんだん認知もされてきて、固定客もでてきた。	固定客もでてきたことから、運営側も喜んではいけるが、助成金による事業ということで、助成金が切れたあとの継続に難渋している。
d. 地域住民が集う場の発展型（7か所）			
d-1	地域の人や近隣の人とのつながりを持つことにより、本人のやりがいや社会参加につながる。	・認知症ケアに巻き込むことができた（グループホーム利用者が畑で作業している間の見守りなど）。 ・認知症の人と同じものを食べ、楽しく会話することによって認知症の方の人としての魅力や多様性を知ってもらえる。 ・地域で閉じこもりがちの人を誘うことで、外出につながった事例もある。	ボランティアのスタッフが認知症の人や地域の人への効果を実感することで、喜びややりがいにつながっている。
d-2	・喫茶スペースは、相談コーナーにも使われることがある。 ・（本人）一服できるスペースとしてコーヒーがあることで、硬い表情が和らいだ。 ・隣のグループホームに面会のご家族が本人さんとつろぐ姿がある。	・街中でなく、はずれにあることで息抜きできると言っていて、姑を介護するお嫁さんが来て、いっぱいお喋りして帰られる。 ・散歩の途中に立ち寄り、お水を飲まれてまた家まで頑張って歩き出される。	単に事業所の介護職員としての視点だけでなく、地域づくり（まちづくり）の観点を共生を理念とするNPOに働くものとして持つことができる。
d-3	認知症カフェとしての取組みというよりも、同じ人として地域の中で暮らし続けられる居場所として考えている。効果としてはハッキリ言えるものを今は持っていない。が、やがて若年性認知症の人の仕事場（補助的）としても使いたいし、家族や周りの人達のやすらぎの空間になれば・・・とも思っている。 昔懐かしい写真、道具、お金、レコード等展示しているのを見ることにより、会話が弾んだり、記憶の呼び起こしの役割をしてくれるのでは？と考えている。とにかく安心して過ごせる居場所、ゆったりの人びりできる居場所として、きっと皆さんに喜んでもらえる場になると思う。皆さんそう言って下さる。	明るくなったし、人通りの少ない通りが人が行きかう様になり、嬉しいと言っている。夜、灯りがついていると温かい気持ちになる。みんなが集える場ができて嬉しい。活気が感じられてとても良い。どこからともなく集まる子供達が来てにぎやか等、みなさんから好評を得ている。	今は資金の面もあり、店長一人で奮闘してもらっている。副店長もいるが常駐は無理。運営は自由に任せている。創意工夫をして一生懸命取り組んでくれている。自分も楽しいとやってくれている。嬉しい限りである。
d-4	・ゆったりした空間で、伸びのび過ごしていただくことにより、身心をリフレッシュしていただきたい。 ・特別な場ではなく、普通で場所、地域の方々と交流していただきたい。	・特別なことではなく、生活の一場面として、様々な方々と交流していただきたい。	・様々な方に接することにより、地域で生活する方々の状況をより理解し、自身の活動に役立て、還元してほしい。
d-5	地域性か、迷惑を掛ける、秘密にしておきたい、誰にも知られたくないという所が多い地域である。現在は少しずつ改善されてきている。軽い認知症の人であれば、介護している人が用事などしたい間、長い時間は無理だが、カフェで預かる場合もあったりする。	行けば、あまり人に邪魔されず、ゆっくり話しながらお茶が飲める。利用する人の変化等も汲み取ることができ、社協、保健師等連絡し解決している。	スタッフは、開設当初は話を否定する様な態度を取る人もいたが、今では相手に合わせて対応している。
d-6	近くのグループホーム入居者（認知症高齢者）の方の中には、「今までの生活の継続（社会性の維持）」、「*****という目標のため、利用していただいている方もいる。ワンコインカフェではボランティア皆が話し相手になり、ご家族やグループホームのスタッフとの会話は一味違うコミュニケーションとなり、社会との触れ合いを実感してもらっている。	月2回では、なかなか買い物ついでに通りに「ぶらり」と立ち寄ってもらうわけにはいかないでいる。	
d-7	このカフェが、安心して参加できる場であることを認識してもらえた。	・お互いがお互いを気遣うようになった。 ・日常的なあいさつから立ち話や一緒に出かけるなど、近所付き合いの幅が広がった。 ・認知症の方が参加しても、違和感なく受け入れることができるようになった。	・参加される方についての情報をもとに、認知症の方や障害を抱える方への理解が深まった。 ・看護師や保健師などの専門職と一緒に訪問やお迎えができるようになった。 ・参加される方の状況によって、高齢者総合相談センターへのつながりができるようになった。 ・自分の地域における認知症本人や家族、高齢者などへの関心が深まった。
e-1	家族への効果：・家族の悩みや思いを充分に聴いてくれる。 ・一人で抱えていた思いをはき出し、泣きもするが帰る頃にはお茶を飲み、菓子を食べ笑顔で帰る。 ・家族のつらいのは同様の状態の人を知って、介護経験を語り合い、悩みを共有できたことを喜び、工夫などを学びとる。 本人：和風民家（庭にテラスを作った）の好きな場所に居ることができる。	一度利用した人が相談する場所として当事者に紹介するようになった。	・スタッフは全員ボランティアであるが、ありのままを受けとめる姿勢はあるように見受けられる。 ・スタッフは利用者とのふれあいに自己実現できているようで、活き活きとなり、次回の活動に積極的に参加してきている。
e-2	現在認知症カフェを実施している訳ではないが、色んな人々が集える場所作りをしている中で、最近の認知症、特に若年が増えていっていると思います。 その方達はまだ介護認定にもならず、障害者にもならず行き先がない人達が増えていっていると思います。 そんな人達が少しでも外出できる機会、集う機会ができ、そして働く場所ができたなら最高です。そんな場所、機会があったらその様な活動をぜひ広げていけたらと思います。若年性認知症の学習会、勉強会、講演会等の機会が是非ほしいです。明日は我が身かもしれないから。		
e-3	泣ける場であり、情報が得られる為の安心感。 介護職（ケアマネ）、介護施設の情報。 介護者・本人、「食」に対するおろそかになっている事の改善。	地域の中にある「つどい場」——いつでも行ける所がある安心感。	必要とされることに対する生きる意欲。（特に見守りタイプ） 講座での学び、本人や家族との旅行やおでかけ、サポート後で自分の存在価値を見いだす。
e-4	中核症状の理解や周辺症状の接し方。最近ではデイサービス外であつ買ってもらいたい！！という困りごとがあり検討している。	少しずつ認知されてきているが、認知症の理解を知っているようで知らない。	

<資料2 認知症カフェ調査一覧>

課題	運営母体	ネットワーク	具体的内容	場所	案内	支援	本人制限	住民制限	負担	運営費	財源
運営側の運営資金、人材に加えて行政からの支援も欠かせない。当団体としては活動場所の確保が必須であるので、行政に対してあるいは市民に対して新しい拠点の提供を求めているが、当地の家賃地代等が高いこともあって、困難な状況である。行政もコミュニティ問題にとりくんではいるものの、旧来の縦割行政の考え方から脱することができていないようで、新しいコミュニティという未知のテーマについては取り組みかねているように感じられる。	2. 6 NPO	1	新しい公共助成金の条件が行政も参加するということであったので、当初からメンバーである。活動を始めてからはいろいろな団体との折衝をしているが、具体的な活動提携というところまでは至っていない。	5	6. 7 チラシ	11 NPOと市民団体のメンバー	1	1	3	5	1. 3
始めて半年もたっていないため、課題や問題点は今のところ特に感じていない。行政に望むことは、トップダウンではなく、良い取組みをモデルにできるところができることを続けていくことができるような支援をしてほしいと思う。何もないところから生み出すことの価値や、見えない効果を見えるようにしていくことを評価してほしい。	6 NPO	1	母体である宅老所***の運営委員会に、地域包括支援センター、自治会長、民生委員、警察署などが入っている。防災訓練などが合同で行った。また医療機関、障害者施設、他県の行政職員などがレストランを訪れることもある。	3	7	1. 3. 11	1	1	2	6	3. 4
・全く無償の喫茶でボランティア不足（現在木曜日の午後に1人（定期）、金曜日の午前に1人（不定期）のみ） ・小さな法人の中で、企画があっても実行に移す人員を確保できない。⇒人の問題	6 NPO	1	法人としての活動拠点の3つの地番（4つの家）はそれぞれ町内会の一員として町費を払い、普通に班長やゴミ集積所、公民館の掃除当番を務める。カフェのある家も同様。障害者就労支援のパン工場のパンを週2回置いている。行政との接点はない。「***サークル」等にある助成は受けられなかった。	5	6	1	1	1	2. 3	2	2. 3
型にはまらない独自の創意工夫が出来て、地域の人や認知症の人、家族の皆さん、又子供達、高齢者にとって「あってよかった！」と思ってもらえる居場所にした。やっぱりなんといっても運営資金が一番ネックで気がかり。いつでも誰でも心をかけると、スタッフは常駐していないといけない。ボランティアだと心が折れる。やりがいの持てるように・・・続けられるように・・・と願っている。一度見てもらえると「作ってよかったね、あってよかったね」と思ってもらえるはず！	6 NPO	1	地域包括支援センター主催の会合の場で使用してもらったり、他のNPO法人や他事業の見学、利用者が多く来所。町内会費の支払いやごみ当番などもしている。ご近所の高齢者もよく来てくれる。	1	4. 6	11	1	1	4 催しにより異なる	4	2. 3
	6 NPO		特定の団体との連携ではなく、互いに地域の一員として交流していただきたいと考えております。	5	1. 2. 3. 4. 5. 7	1. 3. 4. 7. 8	1	1	3	6 未定	1. 2
運営に携わっているスタッフの高齢化により後継者の問題。	7	1	***サロンの開催、子育てサロンの開催、各種趣味の会	1	7 2ヶ月に1回新聞折込	1. 9. 11	1	1	3	4	1. 3
月2回ではなく、もう少し回数を増やしたい思いはあるが、スタッフ（ボランティア）が・・・ グループホームのお客様だけでは、本来の「介護者の癒しの場」PRになるのかというジレンマ。	7	1	***市社協、地域包括支援センター（***）、NPO法人***（隣接する認知症高齢者GH）、㈱***運営の認知症高齢者GH***、民生委員。	5	6	1				2	2. 4 法人の財源
・どのような形で継続運営が可能か、その形を作り上げていくことが今後の課題 ・そのための人材の確保・育成、資金の確保が大きな問題である。	6 NPO	1	***（自治体）の協力のもと、自治会、高齢者総合相談センター、社会福祉協議会などとの連携を図っている。	5 団地の集会室	4, 5, 7	1. 6. 7. 8. 11	1	1	2	5	4
スタッフは常勤2名、昼食会（予約）や行事の際にボランティアさんに来てもらっている。故に、いつでも認知症の本人家族を複数で受け入れるにはスタッフを増やさねばならない。	6 NPO	1	・地域包括支援センターとは昨年からの介護家族の集いへの誘い、参加、助成 ・市、民生委員とはひとり暮らし老人の昼食会へのお誘い	1	3. 5. 6	1. 3. 5. 6. 7	2- b	1	3. 4 申出者のみ賛助会費1口5000円/年	5	2. 3 年によっては助成金もあるときがある
若年性認知症の人の把握、連絡、理解等、もっともっと大きく皆に分りやすくしていきたい。地域、行政等も前向きに色々な人々に周知し、活動の場を広げられる場を作っていってほしい。	6 NPO	2		5	7	3. 7. 11	1	1	4 全て無料	2	2. 4 法人の財源
高額な家賃を駐車場料金を支払っている限り「つどい場」（いつでも誰でも行ける所）が継続不可能になるので、行政のバックアップで「空き家」を利用できる「つどい場」が大切。	6 NPO	1	行政、社協との10年前からのつながり。	5	1. 2. 3. 4. 5. 6	1	1	1	2. 3	5	2. 3 個人借金・講座の参加費
行政や地域との連携、人材と運営資金	6 NPO		先進的事例に周囲にまだ理解されていない。地域包括支援センターと情報交換くらい。	1	6. 7 口コミ	1. 4. 7		1	2	2	2. 3

<資料3 開始時期・開始の理由・動機・開催頻度の一覧>

a. 認知症の人と家族が集う場の発展型(8か所)

	開始時期	開始の理由・動機	開催頻度
a-1	2012年7月	つどいを開くたびに、「何かしたい」「人の役に立つことがあればやりますので言って下さい」という当事者の声があったため	月1回or 週1回
a-2	2008年5月	・若年の方を介護する家族だけのつどいを開催していたが、H20年度のモデル事業助成を受けて、若年本人と家族のつどいを開催したこと	月1回
a-3	2012年4月	家族の会会員の憩いの場をつくること	月1回
a-4	2012年7月	・認知症の母を看取った自宅を改築し、認知症に関心のある人や自分と自分の身の回りの人の将来を考えたい人のために何かできないかと考えて、始めた。 ・平日に開催していたが、平日に来られない人向けに新たに開始。	月1回
a-5	2012年3月	家族会の他に、もっと気軽に、かつ継続的に認知症の人を抱えるご家族の悩み軽減や本人も集える場所づくりをしたく開始した。	月1回?
a-6	2012年4月	特別養護老人ホームより、1階カフェの運営が事務職員で対応してきたが、今後困難となった。介護者の会や地域のボランティアと相談し、活動の拠点があればとの思いで。やれる範囲でボランティアとしてカフェに関わり、自分たちの活動拠点としても活用する。	週4日
a-7	2012年4月	認知症の症状のために閉じこもり、一人で留守番をしているうちに症状の進行だけでなく「できるのにできなくなっている」現状を知り、「デイサービスには行きたくないけど何かしたい」という気持ちが実現できる場所づくりの必要性を感じた。	月6回
a-8	2010年3月	若年認知症の方の居場所づくり、サポーター(一般市民)の方とフラットにお付き合いのできる場づくり、家族交流のため	月8回

<資料3 開始時期・開始の理由・動機・開催頻度の一覧>

b. 認知症または高齢者の専門施設発展型(6か所)

	開始時期	開始の理由・動機	開催頻度
b-1	2013年1月	2007年よりコミュニティカフェを開始(特養の敷地内)。2011年5月～地域の中に2点目を展開し、地域の高齢者を中心に集える場を提携。 その中でも初期認知症、とりわけ若年性の方の医療と介護へのアクセスと居場所づくりの必要性を強く感じていた。	月2回程度
b-2	2012年9月	従来より認知症と診断した場合に、初期から支援は必要にもかかわらず、初期の人が使える介護保険サービスも地域活動も不在であると感じていた。できれば病院ではなく、市民感覚で気軽に利用し相談あるいは自分らしさが発揮でき、認知症になっても生活範囲が縮小していかないような場所ができればと考えていた。京都式認知症ケアのつどいに背中を押されて開始することにした。	週1回
b-3	2012年10月	初期認知症対応型カフェ推進事業。地域住民の集まる居場所として、特養ホーム内にコミュニティカフェを開設し、認知症の方だけに対象をしぼらずに町民全般を対象とする。	月3回
b-4	2010年4月	夫が若年性アルツハイマーとなり、地域の人達に認知症の理解をしていただきたいと立ち上げた。健常者の方に関わってもらい理解してもらえる場所づくりのために開設した。	週1回
b-5	2012年10月	交流会を通じて、2つの問題を把握していた。1つは、初期のうちに認知症と診断されても、デイサービスなどの介護サービスには、なかなかつながらない現状。もう1つは、診断直後は家族もどうしていいのかわからず困ったという現状。これらの問題に対し、早い段階で病気や対応について知ってもらえる場が必要と感じていた時に、京都府より話が合ったから。	1か所につき週1回
b-6	2012年2月	(認知症の本人が)患者や利用者としてではなく「生活者」として参加できる場を形成すること。地域の中に認知症の人と家族、ケアスタッフや医療従事者、市民が「対等」な関係で出会える場を形成すること、他。	毎月流動的に、14時～16時

c. 自治体のモデル事業型(3か所)

	開始時期	開始の理由・動機	開催頻度
c-1	2012年11月	自治体の認知症総合対策モデル地域となっている。市より財団に認知症対応型カフェを委託され、財団職員から「認知症地域支援推進員」を一人専任して配置することになった。その推進員が中心となって開設。	カフェ週2回、スペース週1回
c-2	2000年6月	市の施設で、地域住民が運営。自由に話し、困っていることがあれば行政につなぐ。	平日毎日
c-3	2012年4月	複数のNPO法人等と一緒に活動できないかということを模索していたところに、新しい公共モデル事業という助成金があったことを活用して始めた。(認知症の人の参加実績なし)	日曜以外毎日

<資料3 開始時期・開始の理由・動機・開催頻度の一覧>

d. 地域住民が集う場の発展型(7か所)

	開始時期	開始の理由・動機	開催頻度
d-1	2012年10月	行政で補えない、地域の横のつながりを大切にするため、誰でも立ち寄れるコミュニティレストランを作りたいと考えて。	月2回
d-2	2005年4月	母体の法人が4か所の家を活動拠点としてもっており、町内会の活動にも参加している。カフェのあるのが「しおんの家」。見えないバリアを感じ、心のバリアフリーを目指したかったから。	毎日
d-3	2012年8月	NPO法人おらとこととして介護事業を展開しており、地域の方にお世話になっているので、1か所くらいは恩返しの意味も込め、収支を度外視した取り組みを…と考え実行。一人暮らしや高齢者世帯の多い地域のサポーター的役割も果たせれば良いかな、という思い。地域の居場所づくりと異年齢交流の場。駄菓子屋を開き、子どもも大人も楽しむ。	週2回
d-4	2013年3月 予定	特定の方々の集会の場ではなく、地域の方々が互いの関わりの中から活力を見いだせる場としてご利用いただきたく、子どもから高齢の方々まで利用できる場所としてオープンした。[3月17日開所。NPO法人が運営する。建設費は5千万円。厚生文化事業団に集まった寄付があてられた。]	随時
d-5	2003年10月	空き店舗対策。原則として年寄りから子供まで誰でも利用してもらって交流を深める場として提供している。	日曜以外毎日
d-6	2007年6月	介護者の癒しの場を地域の人に知ってもらう為の手段として、ワンコインカフェを始めた。	月2回
d-7	2009年7月	「地域で介護者や高齢者が孤立しないように気軽に相談できる立ち寄り相談スペース&サロンを開催、また地域資源やサービスへの橋渡しをする仕組みづくりを行う」というコンセプトで提案。自治体の協働事業提案制度に応募し、採択される。	月4回

e. 既存形態にとらわれない個人の実践発展型(4か所)

	開始時期	開始の理由・動機	開催頻度
e-1	2007年4月	母体のNPO法人は、年齢・障害・疾病(慢性)を超えて在宅生活を支えようとして設立された。介護保険によらないで集える場、自分にできる・好きなことをして(はたらく＝端業)力を発揮する場(ボランティア)をつくる。	平日毎日
e-2	2002年11月	もともと地域ボランティアとして地域公民館で高齢者のお茶飲み会をしていたが、ボランティア活動に限界を感じた。認知症はもちろん、高齢者、障害者・児が集えて、誰でも気軽に立ち寄れるお茶のみ場が欲しかったから。デイサービスも開所。	毎日
e-3	2003年3月	つどい場がないのでNPO法人として始めた。家族を介護した経験から、本人も家族も介護保険では支援されていないという思いがあった。介護の経験からヘルパー講習を受けたが、その内容にキレて、開所。	毎日
e-4	2008年3月	看護師・保健師・ケアマネの資格を持っていたことから、地域の高齢者世帯の増加や相談が多くなり、新興住宅地の希薄な関係から課題であると認識した。	週1回

認知症カフェに関する調査への協力をお願い

認知症の人と家族の会では、厚生労働省の補助を受け「認知症カフェのあり方と運営に関する調査研究事業」※を行っています。これは、現在国内で実践されている認知症カフェおよび、それに類するつどいの場における内容や効果、課題等を明らかにすることを目的としています。

認知症カフェという名称であるか否かを問わず、認知症の人と家族が安心して集うことができる場、地域の誰もが利用できる場所において活動をしている語らいの場などを対象として、この調査を行います。

つきましては、このような取り組みをされている団体あるいは個人にご協力をお願いする次第です。

大変お忙しいことと存じますが、別紙調査票にご記入をお願いいたします。

※平成24年度厚生労働省老人保健健康増進等事業国庫補助金の助成による

2013年2月

公益社団法人 認知症の人と家族の会
代表理事 高 見 国 生
認知症カフェ調査検討委員会委員長 荻山和生

〔ご記入いただく上での注意点〕

- ・調査票は全部で4ページあります。
- ・回答欄左端に□を設けているものには、該当項目に☑を入れて下さい。選択の順番を記入する場合は〔 〕内に番号を記入して下さい。また（ ）内には具体的な文言を記入して下さい。

〔ご回答は…〕

- ・添付の返信用封筒で「家族の会」事務局あてに**2013年*月**日(※)**までにお送りください。
- ・この調査を依頼した者に直接お渡しいただいてもかまいません。

担当者：調査作業部会責任者 鈴木 和代
調査検討委員会事務局（「家族の会」事務局）：
〒602-8143 京都市上京区堀川通丸太町下ル
京都社会福祉会館 2階
TEL：075-811-8195 FAX：075-811-8188
E-mail：office@alzheimer.or.jp

認知症カフェに関する質問調査票

1	開始時期はいつですか？ 年 月
2	開始の理由、動機はどのようなことですか？以下に簡単に記載して下さい。
3	開設・実施にあたり参考にした例を教えてください。（自由記述）
4	カフェの目的はどのようなことですか？ 大切にしている順番に番号を記入して下さい。（5つまで） 〔 〕 認知症初期の人への支援 〔 〕 本人や家族介護者の緊張緩和 〔 〕 本人や家族への認知症教育 〔 〕 本人や家族が気楽に立ち寄れる場作り 〔 〕 市民の意識改革 〔 〕 認知症の人の思いを社会に発信 する場 〔 〕 本人の社会参加活動の場 〔 〕 認知症の病気や支援制度についての情報提供の場 〔 〕 医療・介護専門職と本人や家族、市民が平等な立場で交流する場 〔 〕 本人や家族が当事者同士で集うことによる、ピアカウンセリングの場 〔 〕 その他 〔 〕
5	カフェで行っている内容について具体的に教えてください。（具体的に記述）

6	上記の目的や内容を達成するために工夫していることはどんなことですか？（自由記述）
7	認知症カフェを実施して、どのような効果や変化を感じていますか？ 本人や家族への効果
	地域住民への効果
	スタッフへの効果
	その他
8	今後継続していくうえでの課題や問題点、欲しい支援はどんなことですか？（自由記述）

9	その他												
カフェの名称	届出（ ） 愛称・呼称があれば（ ） 愛称の由来（ ）												
カフェの所在地	（ ） 都道府県（ ） 市郡（ ） 区町												
運営母体	<input type="checkbox"/> 家族の会など当事者会 <input type="checkbox"/> 市町村 <input type="checkbox"/> 都道府県 <input type="checkbox"/> 医師 <input type="checkbox"/> 医療機関 <input type="checkbox"/> 法人（ NPO、 社会福祉 社団 ） <input type="checkbox"/> その他												
地域との連携	自治体・地域包括支援センター・地縁組織（自治会・民生委員・NPO）等と連携 するなど、地域とのネットワークはありますか？ <input type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ 具体的な内容を記載して下さい。 （ ）												
活動場所	<input type="checkbox"/> 民家（個人の家） <input type="checkbox"/> 地域の喫茶店・レストラン等の店舗 <input type="checkbox"/> 病院・施設の一室 <input type="checkbox"/> 行政・社協建物の一室 <input type="checkbox"/> その他（ ）												
本人や家族への案内方法	<input type="checkbox"/> 主治医から <input type="checkbox"/> 家族の会など当事者会から <input type="checkbox"/> 民政委員から <input type="checkbox"/> 医療・介護職者から <input type="checkbox"/> 行政窓口担当者から <input type="checkbox"/> 広報で <input type="checkbox"/> その他（ ） （広報名： ）												
カフェの実施頻度	毎（□週・□月）（ ）時～（ ）時 曜日（ ）												
支援スタッフの背景（複数回答可）	<input type="checkbox"/> 市民ボランティア <input type="checkbox"/> 民生委員 <input type="checkbox"/> 家族の会を含む当事者団体のメンバー <input type="checkbox"/> 認知症サポーター <input type="checkbox"/> 医師 <input type="checkbox"/> 医師以外の医療専門職 <input type="checkbox"/> 介護専門職 <input type="checkbox"/> 福祉専門職 <input type="checkbox"/> 行政及び社協職員 <input type="checkbox"/> 老人福祉員 <input type="checkbox"/> その他（ ）												
1回の利用者の概数と内訳	<table><tr><td>本人</td><td>家族</td><td>支援者（専門職・ボランティア・市民含む）</td></tr><tr><td>人</td><td>人</td><td>人</td></tr><tr><td></td><td></td><td>一般の市民</td></tr><tr><td></td><td></td><td>人</td></tr></table>	本人	家族	支援者（専門職・ボランティア・市民含む）	人	人	人			一般の市民			人
本人	家族	支援者（専門職・ボランティア・市民含む）											
人	人	人											
		一般の市民											
		人											

調査同意書

私は、認知症カフェのあり方に関する実態調査のアンケート(質問)を受けるにあたり、説明者(調査者)より、年 月 日、(場所)において説明書を用いて説明を受け、調査計画の概要、成果の発表方法、個人情報保護の方法、ならびに安全管理での配慮、同意に関する事項について十分理解しましたので、調査に参加し求められた情報を提供することに同意いたします。

説明を受けて理解した項目

- 1 実態調査の概要に関する事項
- ☐ 調査の目的と方法
- ☐ 調査成果の発表方法
- ☐ 提供する情報等
- 2 個人情報保護の方法に関する事項
- ☐ 個人情報の収集が、事業目的、事業計画に照らして必要であること
- ☐ 情報の保管・管理について適切になされること
- ☐ 報告書に情報を匿名化して掲載すること
- 3 安全管理に関する事項
- ☐ 予見される身体的、精神的な負担について
- 4 同意に関する事項
- ☐ 調査への参加は任意であること
- ☐ 調査の参加に同意しないことにより不利益な対応を受けないこと
- ☐ 調査の参加に同意した後でも、いつでも申し出により同意を取り消すことができること
- ☐ 同意を撤回しても、そのことにより何ら不利益を被らないこと
- ☐ 収集した情報は、他者に渡さないこと
- ☐ 問い合わせに関する連絡先

年 月 日 氏 名 (自署)

本人が回答けない場合
代諾者 (自署)

参加する認知症の人に対する制限の有無	<div><input type="checkbox"/> 制限も条件もない</div> <div><input type="checkbox"/> 認知症の重症度による制限がある (下記の当てはまるところに☑してください)</div> <div><input type="checkbox"/> MC 1 <input type="checkbox"/> 軽度認知症 <input type="checkbox"/> 中等度認知症 <input type="checkbox"/> 重度認知症</div> <div><input type="checkbox"/> その他 ()</div> <div><input type="checkbox"/> 年齢による制限がある (カッコに具体的な数字をご記入ください)</div> <div>() 歳以上 () 歳以下</div> <div><input type="checkbox"/> その他の条件がある (カッコに具体的な内容をご記入ください)</div> <div>()</div>
参加する地域住民に対する制限の有無	<div><input type="checkbox"/> 制限も条件もない</div> <div><input type="checkbox"/> 参加できる人に一定の条件をつけている (下記より選択)</div> <div><input type="checkbox"/> 民生委員 <input type="checkbox"/> 認知症サポーター <input type="checkbox"/> その他 ()</div>
本人・家族の利用負担 (複数可)	<div><input type="checkbox"/> 会費制 (1人月額 円)</div> <div><input type="checkbox"/> 1回ごとの利用料を徴収 (1人1回につき 円)</div> <div><input type="checkbox"/> 飲食費・施設使用費など実費のみ徴収</div> <div><input type="checkbox"/> その他 ()</div>
運営費用 (年間推計)	<div><input type="checkbox"/> 10万円未満 <input type="checkbox"/> 10万円～50万円 <input type="checkbox"/> 50万円～100万円</div> <div><input type="checkbox"/> 100万円～200万円 <input type="checkbox"/> 200万以上 <input type="checkbox"/> その他 ()</div>
運営の費用の財源	<div>財源の割合が大きいものを2つ、順に番号をつけて下さい。</div> <div><input type="checkbox"/> 財団・行政などの助成金</div> <div><input type="checkbox"/> 自己資金 (組織・個人・寄付など)</div> <div><input type="checkbox"/> 会費・飲食費などの本人負担</div> <div><input type="checkbox"/> その他 ()</div>

以上です。ご協力ありがとうございました。

謝 辞

本調査にご協力いただいた全国の認知症カフェおよびそれに類するつどい場の代表者の皆様、利用者の皆様に感謝申し上げます。また、海外の認知症カフェ事情についてお忙しい中で情報提供を下さった、堀田聡子氏、井上恒男氏にも感謝申し上げます。今回の調査について調査に出向いて下さった協力者の皆さん、ありがとうございました。多くの方のご協力により報告書が完成しましたことを心より感謝致します。

認知症の人と家族の会

認知症カフェのあり方と運営に関する調査検討委員会

委員長 荏 山 和 生

作業部会 委員長 鈴 木 和 代

認知症カフェのあり方と運営に関する調査検討委員会名簿

(五十音順)

	委 員 名	所 属 ・ 役 職 名
	江 口 恭 子	大阪府立大学 看護学部生活支援看護学領域 老年看護学分野 助教
	勝 田 登志子	「家族の会」 副代表理事
◎	荏 山 和 生	佛教大学 保健医療技術学部 作業療法学科 准教授
○	鈴 木 和 代	京都大学大学院 医学研究科人間健康科学系専攻 生活環境看護学分野 助教、「家族の会」 理事
	高 見 国 生	「家族の会」 代表理事
	武 地 一	京都大学医学部附属病院 老年内科 診療科長
	水 流 涼 子	「家族の会」 調査・研究専門委員会委員長
	橋 本 武 也	社会福祉法人同和園 常務理事
	牧 野 史 子	NPO法人アラジン 理事長
	真 下 勝 行	長岡ヘルスケアセンター リハビリテーション課長（作業療法士）

◎委員長 ○作業部会長

支部名	代表者	郵便番号	住所	TEL	FAX
北海道	阿部 武	060-0002	札幌市中央区北2条西7丁目かでる2.7 4階 電話相談（月～金10時～15時）	011-204-6006	011-204-6006
青 森	石戸 育子	031-0841	八戸市鮫町字居合1-3 電話相談（水・金13時～15時）	0178-35-0930 0178-34-5320	0178-34-0651
岩 手	小野寺彦宏	024-0072	北上市北鬼柳2-2-46 電話相談（月～金 9時～17時）	0197-61-5070 0192-25-1616	0197-61-0808
宮 城	関東 澄子	980-0014	仙台市青葉区本町3丁目7-4宮城県社会福祉会館2階 電話相談（月～金 9時～16時）	022-263-5091	022-263-5091
秋 田	佐藤 敦子	010-0921	秋田市大町1丁目2-40 秋田県庁内（月10時～14時）	018-866-0391	018-866-0391
山 形	山名 康子	990-0021	山形市小白川町2丁目3番31号山形県総合社会福祉センター3階 電話相談（月・金 13時～16時）	023-687-0387	023-687-0397
福 島	佐藤 和子	960-8141	福島市渡利字渡利町9-6	024-521-4664	024-521-4664
茨 城	宮本 武憲	300-3257	つくば市筑穂1-10-4大穂庁舎内 電話相談（月～金12時～16時）	029-879-0808	029-879-0808
栃 木	金澤 林子	321-3235	宇都宮市鑑山町894-6 電話相談（火・水・木13時30分～16時）	028-667-6711 028-627-1122	028-667-6711
群 馬	田部井康夫	370-3513	高崎市北原町67-4（月～土9時～17時）	027-360-6421	027-360-6422
埼 玉	宮下 房江	331-0823	さいたま市北区日進町1-709 埼玉県たばこ会館1F 電話相談（月・火・金10時～15時）	048-667-5553	048-667-5953
千 葉	広岡 成子	260-0026	千葉市中央区千葉港4-3 千葉県社会福祉センター3F（月・火・木・13時～16時） 電話相談・ちば認知症相談コールセンター（月・火・木・土10時～16時）	043-204-8228 043-238-7731	043-204-8256 043-238-7732
東 京	大野 敦子	160-0003	新宿区本塩町8-2住友生命四谷ビル（火・金10時～15時） 認知症てれぼん相談（火・金10時～15時）	03-5367-8853 03-5367-2339	03-5367-8853
神奈川	杉山 孝博	212-0016	川崎市幸区南幸町1-317 レー川崎203号（月・水・金 10時～16時） かながわ認知症コールセンター（月・水10時～20時、土～16時） よこはま認知症コールセンター（火・木・金 10時～16時）	044-522-6801 0570-0-78674 045-662-7833	044-522-6801
山 梨	小野 早苗	400-0867	甲府市青沼3-14-12平井出方（火・木10時～15時）	055-227-6040	055-227-6040
長 野	関 靖	399-2602	飯田市下久堅下虎岩780-2関靖方 電話相談（月～金 9時～12時）	0265-29-7799	0265-29-7799
新 潟	金子裕美子	941-0006	糸魚川市竹ヶ花45 金子裕美子方	025-550-6640	025-550-6640
富 山	村井 和恵	930-0093	富山市内幸町3-23菅谷ビル4F（夜間電話相談 毎日20時～23時） 電話相談（月・木 13時30分～15時30分）	076-441-8998 076-441-0541	076-441-8998
石 川	井沢恵美子	920-0017	金沢市諸江町下丁288（月～土 9時～17時）	076-237-7479	076-239-0485
福 井	前川 久子	917-0093	小浜市水取3-1-16	0770-53-3359	0770-53-3359
岐 阜	白木登美子	509-0107	各務原市各務船山町3丁目73-2	058-370-6267	058-370-6267
静 岡	佐野三四子	416-0909	富士市松岡912-2 認知症コールセンター（月・木・土 10時～15時）	0545-63-3130 0545-64-9042	0545-62-9390
愛 知	尾之内直美	477-0034	東海市養父町北堀畑58-1 認知症介護相談（月～金10時～16時）	0562-33-7048 0562-31-1911	0562-33-7102
三 重	下野 和子	513-0806	鈴鹿市算所5-3-38 B-1	059-370-4620	059-370-4620
滋 賀	青木 雅子	525-0072	草津市笠山7丁目8番138号 滋賀県立長寿社会福祉センター内 フリーダイヤル電話相談（月・水・金10時～15時）	077-567-4565 0120-294-473	077-567-4565
京 都	荒牧 敦子	602-8143	京都市上京区堀川通丸太町下ル 京都社会福祉会館2F	075-811-8399	075-811-8188
大 阪	坂口 義弘	545-0041	大阪市阿倍野区共立通1-1-9 電話相談（月・水・金11時～15時）	06-6626-4936	06-6626-4936
兵 庫	酒井 邦夫	651-1102	神戸市北区山田町下谷上字中一里山14-1しあわせの村内（月・木10時～17時） 電話相談（月・火・金10時～16時）	078-741-7707 078-360-8477	078-741-7707
奈 良	屋敷 芳子	631-0045	奈良市千代ヶ丘2丁目3-1（火・金10時～15時、土12時～15時）	0742-41-1026	0742-41-1026
和歌山	西村 忠	641-0042	和歌山市新堀東2-2-2 ほっと生活館しんぼり内 （コールセンター家族の会 月～土10時～15時）	073-432-7660	073-432-7593
鳥 取	吉野 立	683-0811	米子市錦町2-235 電話相談（鳥取県認知症コールセンター）月～金10時～18時	0859-37-6611	0859-30-2980
島 根	堀江徳四郎	693-0001	出雲市今市町1213 出雲保健センター内（月～金10時～16時） 島根県認知症コールセンター	0853-25-0717 0853-22-4105	0853-31-8717
岡 山	妻井 令三	700-0807	岡山市北区南方2-13-1 岡山県総合福祉センター（月～金10時～15時） おかやま認知症コールセンター（月～金10時～16時）	086-232-6627 086-801-4165	086-232-6628
広 島	村上 敬子	734-0007	広島市南区皆実町1丁目6-29（事務所・相談：月・水10時～16時） 広島市認知症コールセンター（月・水12時～16時） 相談室 広島県健康福祉センター内（毎月第2・4火曜日13時～16時30分）	082-254-2740 082-254-3821 082-253-5353	082-256-5009
山 口	川井 元晴	753-0813	山口市吉敷中東1-1-2 電話相談（月・水10時～16時）	083-925-3731	083-925-3740
徳 島	大下 直樹	770-0943 770-0932	徳島市中昭和町1丁目2番地 徳島県立総合福祉センター 1F 徳島県認知症コールセンター（月～金10時～16時）	088-678-8020 088-678-4707	088-678-8110 088-678-4707
香 川	松木香代子	760-0036	高松市城東町1-1-46	087-823-3590	087-813-0778
愛 媛	門屋 征洋	790-0843	松山市道後町2-11-14 電話相談（月・水・金9時～16時）	089-923-3760	089-926-7825
高 知	佐藤 政子	780-0870	高知市本町4-1-37 高知県社会福祉センター内 電話相談（月～金10時～16時）	088-821-2694 088-821-2818	088-821-2694
福 岡	内田 秀俊	810-0062	福岡市中央区荒戸3丁目3-39福岡市市民福祉プラザ団体連絡室 （火・木・金 10時30分～15時30分 第三火曜を除く）	092-771-8595	092-771-8595
佐 賀	森 久美子	840-0801	佐賀市駅前中央1-9-45 三井生命ビル4F	0952-29-1933	0952-23-5218
長 崎	長尾 一雄	852-8104	長崎市茂里町3-24長崎県総合福祉センター県棟4階（火・金10時～16時）	095-842-3590	095-842-3590
熊 本	米満 淑恵	861-4125	熊本市南区奥古閑町4375-1（月～金9時～17時） 電話相談（熊本県認知症コールセンター 水曜日除く毎日9時～18時）	096-223-0825 096-355-1755	096-223-2329 096-355-1755
大 分	中野 孝子	870-0161	大分市明野東3丁目4番1号大分県社会福祉介護研修センター内 （火～金10時～15時）	097-552-6897	097-552-6897
宮 崎	吉村 照代	880-0806	宮崎市広島1丁目14-17	0985-22-3803	0985-22-3803
鹿児島	水流 凉子	890-8517	鹿児島市鴨池新町1-7 鹿児島県社会福祉センター2F （火・水・金10時～16時）	099-257-3887	099-257-3887
本 部	高見 国生	602-8143	京都市上京区堀川通丸太町下ル 京都社会福祉会館2F フリーダイヤル電話相談（月～金10時～15時）	075-811-8195 0120-294-456	075-811-8188

○支部未結成果の連絡先

沖縄県／琉球大学大学院 担当：金武 TEL098-895-3331(内線2619)、FAX098-895-1432

認知症カフェのあり方と運営に関する 調査研究事業 報告書

発行日 2013 年(平成 25 年)3 月
編集・発行 公益社団法人認知症の人と家族の会
代表理事 高見 国生

〒602-8143
京都市上京区堀川通丸太町下る 京都社会福祉会館 2 階
TEL (075)811-8195 FAX (075)811-8188
E メール : office@alzheimer.or.jp
ホームページ : www.alzheimer.or.jp

平成 24 年度老人保健健康増進等事業（老人保健事業推進費等補助金）
